

---

# 火の使い魔は神様

喜一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

火の使い魔は神様

### 【Nコード】

N9621L

### 【作者名】

喜一

### 【あらすじ】

神様がゼロ魔の世界に迷い込んでしまいます。

神様とキュルケが強く惹かれます。

## 第一話 始まり

自前HPで描いていた二次創作の平行世界でしたがオリキャラ物に変更し、掲載場所も変えることにしました。

ヒロインはキュルケです。

ハルケギニアと呼ばれる世界は王族、貴族、平民といった身分の人間たちが生活している。

現在の基準で言えばパツと見た目、中世の雰囲気に近い。

だが、この世界と我々が知る中世の世界と大きく異なるところがある。

それは魔法がある世界であり、おとぎ話での存在でしかない竜などがおり、人間と姿形が似ている亜人と呼ばれる存在がいるということなどだ。

魔法が使える人間は「始祖ブリミル」という伝説の人物を先祖に持つ者で、彼らが王族、貴族と呼ばれる身分についていて平民と呼ばれる人間を支配している。

魔法が使える者と使えない者との間にときおりいざこざが起きるがおおむねは平和な世界。

それがハルケギニアという世界である。

物語はハルケギニアのゲルマニア帝国領内、トリステイン国という国同士の国境に近い貴族領にて始まる。

森林の中を初老に入っていくらかたつていであろう貴族夫婦が台車を引いている。荷物は山積みキノコだ。

「あなた、見てください。こんなにキノコが採れましたよ」

「うむ、これだけ取ればしばらくのおかずには困りそうにないね」  
夫婦の名はケント夫妻。夫の名はジヨナサン。妻の名はマーサと

いう。

夫婦は貴族ではあるがそんなに裕福ではなく、子も早世してしまっていない。

しかし、非情に仲むつまじく、漂う雰囲気は周囲を和やかにするもので家中の使用人や領民から敬われている。

この森は夫婦の所有する屋敷の敷地内なのだがかなり広大なために食料を採ったりもできる。

二人の会話から察するに今日はキノコ狩りの帰りのようだ。

「うん?!」

ジョナサンが何かに気づく。

「どうしました?」

「あれを!」

ジョナサンが顎で進行方向を示す。言われたマーサもジョナサンが見ている方向へと目を向けた。

そこには三人の人間らしきものが倒れていた。

銀髪の青年と黒髪をして背中に羽を持った少年らしきものが地面に倒れ、2メートルを超していて病的に白い肌をし、耳の尖った亜人がすぐ側に倒れている。

三人はあちこちに怪我があり、一目で重傷であることがわかる。

一人、銀髪の青年はなんとか身体を動かそうともがいている。

「あなた!人間と亜人が!」

「ああ、助けなくては!」

二人は亜人二人の側に倒れている人間を助けようと走り出す。

ここ、ハルケギニアでは亜人は危険視される対象なのだ。

「待っていないさい、今助ける」

夫婦は三人に近づくとまず、亜人二人を排除しようとした。夫婦の手にはキノコ採りのときに使ったナイフが握られている。

殺すつもりはないが青年を助けるには痛手を与えておかなくてはならない。

「ぐう、やめるー!ー!」

しかし、夫婦の行おうとしていることを理解した青年が夫婦にやめるよう叫ぶ。

「ぼ、僕の友人に手を出すな！そ、それでも二人を手にかけるといふのなら僕が相手をする！！」

青年は足下をふらつかせながら立ち上がり、夫婦を睨んだ。

「……！ク、クラーク！？」

夫婦は銀髪の青年の顔を見たときに驚きの声をあげた。

青年はケント夫婦の早世した美男の息子に生き写しであった。

「ぐ……あ……二人は死なせない……」

青年は夫婦を睨みながら呟くと意識を完全に手放した。

「マーサ、君は彼らの様子を見ていてくれ。私は屋敷から人を連れてくる」

「はい……」

青年にとって亜人二人は大切な存在であることを知った夫婦。

ジョナサンは大急ぎで屋敷へと戻り、マーサが重傷の三人を解放しだす。

「クラーク。あなたなの？」

マーサは青年に問いかけるが青年からの返事はなかった。

数日後。

「ん……」

銀髪の青年が目を覚ます。同時に目に飛び込んできたのは仲間の顔と意識を失う寸前に見た初老の夫婦であった。

「気がついたかね」

ジョナサンが青年に語りかける。

「はい」

「サドラーとルフのことはすまなかった。君の友人だとは知らなかったのだ」

「そうですね。僕の名はアグルと言います。貴方たちは？」

「私たちはここら一帯を治める貴族夫婦さ。私はジョナサン。隣に

いるのは妻のマーサ」

ジョナサンに紹介されたマーサが軽く頭を下げる。

「お世話になりました」

「礼ならサドラーとルフに言うといい。二人は目覚めた直後、包帯だらけだというのに君の元に行こうとしていたのだから」

ジョナサンが青年と共に発見した少年と亜人に目を向ける。

「二人とも、ありがとう」

青年が少年と亜人に手をさしだす。

「マスター」

「ご主人」

身体のおちこちに包帯を巻き付けた三人がガツチリと手を取り合う。きつとこの三人にはとてつもなく強い絆があるのだろう。

「もうすぐ夕食の時間になる。それまで三人とも語っていると良い」  
夫婦は三人を残して部屋を去っていった。

「あなた……」

「うん。彼の顔を見たとき、クラークが生き返ったのかと思ったよ」  
夫婦は言葉を交わしながら廊下を歩いていく。青年の顔と声は早世した息子のもとの瓜二つ。正直、心は落ち着かない。

「なにかの巡り合わせでしょうか？」

「それはわからない。すべては彼らの素性を知ってからだ」

「二人とも、ここはどういう世界なの？」

青年が亜人と少年に話し出す。

ここで青年たちのことを書こう。

青年の名は「アグル」、しんぞく神族とまじんぞく魔神族という特異の種族である両親の間に生まれた存在。

神族はその名の通り神の一族で魔神族は数々の魔法、闘いに特化した神の一族だ。

アグルは半神半魔という人間界ではハーフやダブルとでもいうべ

き存在。

人間世界と同じで神々の間でも混血をあまりよく思わない存在は多い。よって、アグルは神族でも魔神族でもいられる場所は少ないため、気ままな異世界の旅を生業とする。

少年と亜人はアグルが旅で出逢った後、部下となり、やがては無二の親友となった鳥の怪物と魔人だ。

二人の名は「ルフ」と「サドラー」、アグルとのつきあいはもう数万年以上ある。

ルフとサドラーは普段は鳥、もしくは馬などの形なのだが前の旅でアグルは世界をめぐる争いに巻き込まれてしまった。

ルフとサドラーは人間形態でアグルと共に戦った。

戦いは苛烈を極め、戦いが終わった直後にサドラーとルフは共に気を失ってしまった。

アグルは残っていた力を振り絞ってルフとサドラーをなんとか命に別状がないところまで治し、世界を去るためのゲートを開いた。

だが、どこの世界にゲートをつないだのか確認もできないうちに力を使い果たしてしまった。

そんな状況のとき、ジヨナサンとマーサに遭遇したのだ。

アグルのこと  
「ご主人、ここは「ハルケギニア」らしいよ」

アグルの問いにルフが答える。

「ハルケギニアだって？ずいぶんと久しぶりに来たなあ」

「はい、およそ六千年ぶりくらいですね」

どうやら三人はこの世界を知っているようである。

「ブリミルという名だったかな？異世界への門を開こうとしたのは」

「ええ、私がブリミルと四人の使い魔を叩きのめして依頼の地を封印したきりです」

「あのと時のサドラーは魔人としての力を全開にして戦っていたからね。いくら巨大な力を持つ人間でも勝てるわけないよ」

「それよりもご主人、具合はどうなの？力は回復しているの？」

「駄目だね。今の僕は多分、君たちと同じくらいまで力が落ちてい

る」

アグルが自分の回復の程度を確認しながらルフの問いに答える。神であるアグルは他の生命体と数次元以上の力の隔りがある。しかし、今のアグルの回復ぶりは三次元世界では敵無しというぐらゐまで落ちている。

前の戦いはそれぐらい消耗する激しい戦いだっただということだ。

「では、旅はどうします？」

「今のままでは異世界につなぐゲートも開けない。回復に専念するしかないようだね」

三人の会話は夕食の時間まで続いた。

数ヶ月後、ケント夫婦は養子を迎え入れることとなる。

養子の名は「アグル」容姿も性格も頭脳も超一級品で魔法の腕前は国内で最強と言われる十人を同時に相手しても軽く凌駕するほど。特殊な体質のよう<sup>ベガサス</sup>で火、水、土、風の四種類ある魔法を全てをこなすだけでなく、秘密の力もあるという。

そして使い魔はいないが天馬に姿を変えることのできる亜人と南の果てにいる鳥であるペンギンを従えている希に見る逸材だという。

十年後。

「じゃあ父さん、母さん、行ってきます」

アグルが馬形態のサドラーに乗り、両親に挨拶中だ。

今のアグルは隣国、トリステイン王国の魔法学院で教師としての日々を送っている。

一時期、交換留学生としてトリステイン王国に赴いたときに学院の校長に拝み倒されてしまい、そのまま教師となってしまった。

幸い、アグルにはサドラーがいるのでどんな長距離移動も無いに等しい。毎週末は両親と共に過ごしている。

今週は新入生が入学する大事な日がある。

「また週末を待っていますよ」



「うむ。今から楽しみだ」

「はい、それじゃあ。サドラー、出発だよ」

アグルがサドラーに呼びかけサドラーが走り出す。アグルとサドラーは弾丸のような速さで空を飛んでいった。

「彼が息子になってくれてもう十年たったのですね」

「ああ。彼はあとどれくらい我々の息子でいてくれるのだろう。まさか新たな息子が神そのものだなんて思いもしていなかった」

夫婦と屋敷の使用人はアグルたちがどういう存在なのかをすでに知っている。しかし、それが外部に漏れることが決してないあたり屋敷の人間の絆を感じさせる。

「アグルには秘密でしたが今年はキュルケさんがトリステイン魔法学院に留学するそうですよ」

「ほう？それは楽しみだね」

「ええ、キュルケさんは長い間「自分がアグル兄様の妻になる」と宣言していましたからね。ヴァリエール家のルイズさんも入学するそうですしアグルの周囲は面白いことが起きてきそうです」

マーサがアグルの周囲でこれから起こるであろうことを想像しながら笑みを浮かべる。

ジョナサンはマーサの賢さに苦笑するのであった。

「そんなにアグルに嫁を取らせたいのかい？」

「当然ですよ。母が息子に良い嫁を与えたいと思うのは当然のことではないですか」

キュルケとルイズというのはかつてアグルが家庭教師を行った少女たちの名だ。

ケント夫妻の領地はキュルケの家の領地、ルイズとの家の領地と隣り合っており、アグルの人柄と実力を高く評価した互いの家がアグルに家庭教師を依頼した。

そしてキュルケはアグルを一目見たとたん「私があなたの妻になるわ!」と宣言してしまい、アグルの目を思い切り点にさせてしまったという武勇伝を持っている。

キュルケの家、ツエルプストー家は恋多き一家だがキュルケは初めて見た大人の異性に対して一瞬にして永遠に消えることのない愛という名の炎を心にともしてしまっただらう。

本人曰く、運命の出逢いで「兄様（キュルケはアグルをこう呼ぶ）と私は愛という「鎖」で結ばれているの」ということだ。

アグルの周囲が賑やかになってきそうである。

学院に到着したアグルは新入生の受け入れ準備のため忙しく動き回っている。

「ルフ。重いけど頑張ってね」

「クケ〜」

隣にはペンギンの形をしたルフが付き添い、主人と一緒に走り回る。

ルフは女子生徒たちの人気者だ。

人間形態をとることは滅多にない。

「あ？ケント先生にルフ〜」

アグルとルフを見つけた女子生徒がアグルらに手を振る。手を振り返された生徒たちは黄色い声をあげるのだった。

サドラーはというと外で建築仕事をしながら働いている。

周囲には生徒や教師の使い魔が多数いてサドラーの仕事を手伝っている。

亜人であるサドラーは学園の中でも別格的存在に見られており、意外と好き勝手をして何も言われない。

更に使い魔たちの間では王のごとく崇められており、サドラーの言うことに背く動物はいない。

（ルフはその次に崇められている）

動物たちはサドラーとルフがどういう存在かを知っているのだから。

今、サドラーが作っているのはアグル、ルフと一緒に住むための

平屋だ。空き室になる予定の部屋もいくつかある大きめの平屋である。

「だいぶできてきましたね。これならあと一週間ほどで完成というところでしょうか？」

昼過ぎ、アグルは入学式の準備のために入寮する生徒たちを出迎えていた。

入学式はまだ数日先のことであるが学院は全寮制であり、入学するのは貴族の子供たちであるため荷物が多いことが普通である。よって今のうちに入寮する生徒が多い。

アグルは忙しく立ち回っていたのだが

「アグル兄様！」

と、後ろから声をかけられた。その声はアグルに聞き覚えのある声だった。

「ん？」

アグルが振り返ったそこには火のように赤い長髪を持った長身で男の目を虜にして止まないであろうプロポーションに褐色の肌をした美少女が立っていた。

少女はアグルが確認する間もなくアグルにしがみつく。

その少女はかつてアグルがとある家からの頼みで家庭教師をし、妹のように想っていた少女だった。

名はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。

使える魔法の属性は「火」である。

「キュルケ？キュルケじゃないか」

「兄様、会いたかった」

キュルケがアグルを潤んだ目で見上げる。

「なぜ君がここに？君はゲルマニアの学園に行ってるんじゃないか」

「私、ここに入学することにしたの。留学生としてね」

「留学生？それは凄いな……。でもなぜトリスティンに？」

「だって兄様はこの教師でしょ？私の将来の旦那様に再び授業を受ける……。素敵なことじゃない？」

キュルケがトリスティンに来た最大の理由。それはどうやらアグルらしい。

「うれしいことを言ってくれね。でも、君みたいな美人には僕以上の男が現れると思うけどなあ」

アグルがキュルケの髪をなでながら返す。

「嫌！！兄様以上の男なんて絶対にいないもの！私はずっと兄様といたい。だから必死で勉強して留学生になったんだから！」

キュルケがアグルにしがみつく腕を強くする。

「それに兄様は私にとって初めてで最後の殿方なのよ。兄様は初めての相手を粗末にするつもりなの？」

キュルケの目が一段と潤む。

実はアグルとキュルケは互いに初体験を捧げ合った仲だ。

アグルの誕生日にキュルケが自分をプレゼントしたのだ。

そのとき、アグルは自分の正体を打ち明け、種族の違い故に結ばれてもキュルケが得をすることはないことを伝えたのだがそれでもキュルケは譲らなかつた。

神相手に一步も譲らないあたり、女は強い。（要するにキュルケはアグルの正体をすでに知っている）

そして二人は最高の初体験と夜を過ごした。初体験の相手以外に異性経験は互いに一人もいない。

「粗末ってそんなことするわけないよ」

アグルにとつてもキュルケは大切な存在。最初は妹のように思っていた存在だったのだが自分の身を捧げてくれるまで自分を慕ってくれる女性を無下になどできるはずがない。

「ふう……。」

アグルがキュルケの肩を軽く叩く。

このときからキュルケは暇があればアグルのところに来るようになるのだった。

「うふふ……」

キュルケが嬉しそうに身をすり寄せる。

だが、キュルケにとって幸せな時間は長く続かない。

「あー！ー！」

アグルとキュルケの近くで何やら大声があがる。

二人が声のした方向を向くとそこにはピンクがかかったブロンドの髪を持つ背の低い少女がいた。

体型はキュルケと正反対というところである。

アグルはその少女にも見覚えがあった。

「おや？君は」

少女の名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

アグルがかつて家庭教師をしたもう一人の少女だ。

アグルにとってルイズの印象は一言で言えば「優等生」だった。

だが、頭に「魔法以外」がつく。

授業態度も良いし頭の回転も良いがなぜか魔法だけが駄目。

（魔法が駄目な理由はアグルだけが気づいていたがアグルはそれを黙っていた。黙っていた理由もちゃんとある）

「ミスタ・ケント！！その女は誰ですか？！ちよつとあなた！どこの誰か知らないけどミスタから離れなさい！！」

ルイズがまくし立てるようにキュルケに迫るがキュルケは離れない。

「なによ！未来の旦那様に抱きついて何が悪いって言うの！？」

逆に火に油を注ぐような言葉を発してより強くアグルに抱きつく。

「なあんですってえ？！ミスタに婚約者がいるなんて聞いていないわよ？！」

ヒートアップするルイズとキュルケだったが事態を沈下させる役

者が現れる。

サドラーであった。

「二人とも、お止めなさい。ここは家の中ではないのですよ?」

「サドラー!」

サドラーを視界に入れた二人が一気に落ち着きをとりもどす。キユルケもルイズも人間型のサドラーを知っているので慌てることはない。

(学院内でもサドラーは安全ということが報されている)

「二人とも久しぶりですね。そしてマスターに代わって紹介させていただきます」

サドラーがキユルケとルイズに睨んでいる相手が誰なのかを紹介する。

「あんたがツエルプストー……。ふ、ふふふふ」

「まさかヴァリエール家の女と一緒に入学するとはねえ……。ふふふ」

にらみ合いながらどす黒いオーラを出すルイズとキユルケであった。

二人の家には先祖から続く因縁がある。

両家は幾世紀以上も昔から戦いを繰り返した間柄だ。

領地は隣り合っているが事実上断絶の状態であり、男と女の事で奪い合いを繰り返したこともある。

初対面とはいえ、先祖の因縁はしっかりと息づいているようであった。

ここでじゃあなぜアグルが仇敵同士の娘を家庭教師することになったかを疑問に思う人もいるだろう。

両家はアグルについては暗黙的に目を瞑ってきたのだ。アグルの実力と人柄はそれだけ大きなものだったということだ。

ルイズは最後にキユルケを一にらみすると去っていった。

「そうだ、兄様。今夜は兄様の部屋に泊まっていいい?」

「僕の部屋に？また、なんで？」

「今宵は兄様に愛されて眠りたいの……」

アグルとキュルケのやりとりを見ているのルフとサドラーはニヤニヤしながら二人の様子を見ているのだった。

## 第二話 誓い

一年後。

早朝、アグルの部屋。

ベッドでアグルとキュルケが互いの裸体を布団にして眠っている。キュルケは自分の部屋があるのだが寝る場所は決まってアグルの部屋だ。

「ん……。兄様……」

キュルケが寝言でアグルを呼び、胸板に顔を擦りつける。その顔は幸せそのものだ。

学園に入学してからのキュルケは昼間の顔は多少、奔放なところがある優等生だが夜になるとガチガチの「妻モード（アグル専用）」となる。

アグルも自分を慕ってくれる存在を全力で大事にするため、毎晩が凄い。

その証拠に室内にはHな匂いが漂っている。

「キュルケ、朝だよ」

先に目を覚ましたアグルがキュルケの髪をなでながら呼ぶ。

「……」

キュルケは微笑みながら目を覚まし、二人は阿吽の呼吸で目覚めのキスをする。二人の目覚めてからの挨拶だ。

離れた顔の瞳には互いの存在しか映っていない。

「フフ……」

二人が見つめ合いながら微笑む。

互いの美貌や肉体美をひけらかせば二人とも異性はよりどりみどりだというのに一途なあたり、ともに異性は一人しか考えられないのだろう。

「さて、朝食の準備をしようか。君はルフとサドラーを起こしてきてくれるかい？」



「ええ。あ！ねえ、兄様。サドラーに乗って少し駆けてきてもいい？」

「いいけど。朝食ができるころには間に合ってよ？」

「もっちゃん 兄様の食事を食べないなんて絶対に嫌なもの」

キュルケが再びアグルの胸板に顔を擦りつけた後、二人は服を着る。

「はい、兄様」

「ん、ありがとうね」

キュルケがアグルのシャツを背中から着せてあげ、

「キュルケ、ちよつと髪が乱れてるよ」

アグルがキュルケの髪の乱れをなおしてあげる。

二人の雰囲気だけ見れば夫婦以外のなんでもない。

学園内でも二人の間は知れ渡っていて特に口出しされることもない。

キュルケが留学生ということもあるし、アグルが大勢の前で堂々と「キュルケは大切な女性です」と宣言したためだ。

キュルケはアグルとの恋愛で間違いなく勝つたのだ。

(ちなみにこの話を聞いたマーサはなぜか両手に扇子をもって万歳したらしい。ジヨナサンは紙吹雪を蒔いたそうだ)

だが、唯一ルイズだけは二人の仲を認めていない。

「サドラー〜」

キュルケがサドラーの部屋の扉を開けるとサドラーは既に起きていて軽く身体を動かしていた。

「おはようございます。キュルケさん」

「サドラー、朝駆けに行きましょう」

二人は挨拶もそこそこに外へと出る。

「くけ〜 (いってらっしゃ〜い)」

外へと出て行く二人とすれ違ったルフ(こちらも既に起きていた)が手をふっていた。

「ん〜〜！やっぱりサドラーに乗って駆けるのは気持ちいい〜  
！」

ペガサスとなつて空を駆けるサドラーに乗るキュルケは上機嫌だ。  
「今日は使い魔召還の儀式があるそうですね？」

ペガサス形態のサドラーがキュルケに問いかける。サドラーは喋  
ろうとすればペガサス形態でも普通に話すことができるのだ。

「そうなのよ。私にはどんな使い魔が召還できるのかしら？」

使い魔召還の儀式とは魔法学院の生徒が1年から2年に進級する  
ための必須項目だ。使い魔が召還できなかった生徒は退学処分とな  
る。実際に退学となつた生徒はいないがそれでも多くの生徒たちに  
とつては緊張する必須項目である。

「あなたならとびきりの使い魔を呼べるでしょう。今や火のスクウ  
エアなのですから」

キュルケの魔法実力はスクウエアと呼ばれる位にまで高まってい  
る。

魔法の使い手のランクは基本的に上からスクウエア（四角）、ト  
ライアングル（三角）、ライン（線）、ドット（点）というものに  
分けられている。

普通、スクウエアになるのには長く厳しい修練が必要なのだがキ  
ュルケは十八才でそこまで登りつめた。

アグルの近くにいるても恥ずかしくないだけの実力を欲していた彼  
女は一生懸命、あらゆる努力を重ねてきたのだ。

そんな彼女がそこいらの生徒と同じくらいの使い魔を呼ぶとはサ  
ドラーにはとても思えなかった。

「うれしいことを言ってくれるわね。どうせならサドラーやルフみ  
たいに神様に使える存在を呼んでみたいわ」

二人の朝駆けはもう少し続き、戻つたところにはちょうどアグルに  
よる朝食ができていた。

「ただいま」

キュルケが元気よく食卓へと入ってくる。そこにはアグル、ルフ以外にもう一人の人物がいた。

青い髪に小柄な身体、身体よりも大きな杖が特徴的な少女だ。

彼女の名はタバサ。無口だがキュルケとは馬が合い、よく一緒にいる。

キュルケがアグルの作る料理に誘ってからというもの、食事時には必ず来るようになった。

「タバサ。いらっしやい」

（コクコク）

「毎日来るけど兄様が作ってくれる食事じゃないと嫌なの？」

（コクコク）

タバサは無言で頷くだけだがキュルケには何を言っているのかこれでいたい分かるらしい。

二人が話している間にもルフとサドラーが料理皿を運んできてそれに気づいたキュルケやタバサも手伝う。

今日の朝ご飯は植物7割、肉3割くらいの健康的なメニューだ。

「あら？兄様。皿が一人分多いわよ？」

キュルケが見た方向には空き皿が一人分あった。

「今日はもう一人くる予「おはようございます！」」

アグルが事情を説明しているところにルイズが勢いよく扉を開けて入ってくる。

皿が一人分多かったのはこういう理由だったのだ。

「あら、ヴァリエールが来るなんて。皿が多かったのはこういうことだったのね」

キュルケは皿が多かった理由を状況で理解し、少し嫌みな目をルイズに向ける。

「なによ！料理を作ってくれているのはミスタでしょう！ツエルプストーは作ってもいないんだから、どうこう言う権利なんて無いわよ！」

実はルイズもタバサと同じくアグルの料理が好物であった。

家庭教師をして貰っているときにその味を覚えたのだ。

普段はキュルケと一緒に食事を取りたくないのに食べに来ないがときおり禁断症状的にアグルの料理が食べたくなるのでこうしてやってくる。

「妻が旦那様の作る料理のことを言っただけに悪いことでもあるの？」

「妻？よくもいけしやあしやあと言うわね。あんたがミスタの妻だなんて死んでも認めないわよ。ご先祖様からの因縁もあるしね」

「あら？兄様は教師陣の前で堂々と「キュルケは大切な女性です」と言ってくれたわよ？」

「それでも認めないわよ！」

一触即発な雰囲気のある二人。それをなだめるのは一人しかいない。

「二人とも、そこまで。喧嘩をしていたら朝食が冷めるよ」

「はい」

アグルの言うことは素直に聞く二人であった。

タバサ、ルフ、サドラーはというとヒートアップしていた二人をよそにすでに食べ出している。

「おかわり」

さっそく一杯目をたいらげたタバサが皿をさしだす。

「三人とも、今日は使い魔召還の儀式だよな？」

「ええ」

「はい」

(コクコク)

「三人とも、凄い使い魔を呼べると思うよ。君たちは学校内でも指折りの優秀な生徒なんだから」

「任せて。サドラーやルフに負けない使い魔を呼んでみせるわ」

(コクコク)

キュルケとタバサは自信たっぷりに戻すがルイズの表情だけがす

ぐれない。

「心配なのかい？ミス・ヴァリエール」  
ルイズが返事代わりに頷く。

彼女は今までずっと魔法に成功したことがない。それなのに使い魔を呼べるだろうか？という不安があるのだろう。

魔法以外は優秀そのものなのだが魔法成功確率は全くなく、必ず爆発を起こすために「ゼロ」という二つ名までついている。

ちなみにキュルケの二つ名は「愛火」でタバサは「雪風」であり、アグルは誰が言うことなく「最強」という二つ名がついてしまっていた。

「心配することはないよ。まずは自分を信じて。できると思わないとできることもできなくなるよ」

「……はい」

アグルの励ましにいくらか楽になったような表情となるルイズであった。

しかし、キュルケが苦笑気味な表情となる。

（ほんと。兄様は女を手玉に取るのが上手いんだから）

自分だけしか異性として見てくれないことはわかっているがそれでもあまり良い気分はしないのであった。

午後、学院の広場に。

広場では予定通りに二年次に進級する生徒達が使い魔を召喚、契約する重要な儀式を行っていた。

すでに使い魔を呼び終えた生徒たちもあり、周囲は非情に賑やかだ。

「次、ミス・ツエルプストー」

生徒たちの守り役で火の属性を持ち、そして寂しくなった頭頂が特徴的な教師、ジャン・コルベールがキュルケを呼ぶ。

「はい」

呼ばれたキュルケが前に出て杖を掲げ、精神集中し、「サモン・

サーヴァント（召還）」の呪文を唱えた。

「五つの力を司るペンタゴン。私の運命に従いし、運命を我と共に征きし、「使い魔」を召喚せよ」

（兄様に……兄様に誇れるような使い魔を！！）

呪文を唱えた瞬間、キュルケの頭に浮かんだのはアグルの笑みだった。

詠唱が終わった直後、キュルケの前に光の柱が現れる。一瞬、周囲がとてつもない眩しさに包まれたがそれもすぐにおさまり、柱がゆったりとした光を放ち続ける。

場所は移り、学院内。

キュルケが召還の呪文と唱えたとき、アグルは廊下を歩いていた。

「ん？」

アグルの目の前に突如、光る門のようなものが現れる。

（これは！）

アグルが落ち着いて門のようなものの向こう側を透視する。先にあったのは自分の大切な女性の姿だった。

（これは……そういうことか。この世界の神よ。僕がこの世界にいたいのなら彼女を守り続けろというのですね……。わかりました。）

アグルは自分の前で起きていることがどういふ事を理解すると迷うことなく光る門へと進んでいく。

場所は再び広場へ

「あ！？どこへ行くんだ？」

「お、おい？」

「え？なに？」

すでに使い魔を呼び終えた生徒たちの元から使い魔が離れ、キュルケが作った光の柱を囲むように集まっていく。

さらに使い魔は光の柱に向かって頭を下げ、目をつぶっている。

生徒たちはその異様な光景に目を釘付けにされた。

周囲からは音が消え、昏間だというのに夜のような静寂さが支配している。

(何が出てくるというの?)

魔法を発動した当のキュルケも状況を把握しきれていない。

キュルケが作り出した柱からはいったい何が召還されるというのだろうか？使い魔の王たる存在が出てくるとでもいうのか？

やがて、光の柱は金属的な音を立てて一瞬で消滅し、キュルケが召還したものが広場に現れる。

キュルケが自分の使い魔として呼んだもの。それは立ちながら目を瞑ったアグルであった。

「やはり、君のところに来たか」

うつすらと目を開いたアグルは誰もが見惚れそうな笑みを浮かべながらキュルケに語りかける。

「え?! な、なんで兄様が出てくるの?! 私は使い魔を呼んだはずなのに」

一方、キュルケは多少混乱していた。

自分は確か、自分が慕う相手に見せても恥ずかしくない使い魔を呼んだはずだ。

なのになぜ自分が慕う相手が光の中から出てきたのだろうか？

運命は自分に神を使い魔にしるとでも言っているのだろうか？

キュルケの混乱は続くがアグルはそんなキュルケの状態をさっし、歩きよると片膝をついて話し出した。

「私、アグルは自分を呼んだキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーを永遠に守り続けることを誓います」

もはやキュルケだけでなく周囲の生徒、コルベールも状況についていけない

「キュルケ、君は僕を使い魔として呼んだんだよ。僕はもう君の使い魔なのだから僕へ印を刻むんだ」

アグルが優しくキュルケに状況を説明し、ようやくキュルケの頭も冷静さを取り戻してきた。

「でも、教師を使い魔にするなんて前例がないわ」

確かに教師が生徒の使い魔になったことなど記録がない。だが、召還で呼び出したものに使い魔の契約を行うことは絶対の規則がある。しなければ退学がほぼ確定してしまう。

「何を言っているんだい。ここで僕を使い魔にしないと君は退学になってしまふんだよ？僕は君にここから居なくなって欲しくなんかない。だから僕に使い魔の印を刻むんだ。コルベール先生、良いですね」

アグルが生徒の守り役を勤めるコルベールに話しかける。

「そうですね。規則は規則です。学院長には私とあなたとで話に行きましょう」

コルベールからの了承は得られた。

「キュルケ」

アグルがキュルケをジッと見つめる。その目は「やるんだ！」と語っていた。

「わ、わかったわ。」

キュルケも覚悟を固める。

「我が名はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー！。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我が使い魔となせ」

キュルケは契約の呪文を唱えるとアグルに背伸びして口づけする。

アグルはキュルケを抱きしめながらそれを受け止める。

「「キヤー！キヤー！」」

周囲では女生徒が黄色い声をあげ出す。美男美女が永遠の愛を誓うキスに見えたからだ。

キュルケが唇をはなして数秒後、アグルの両腕に熱が走る。

「ぐー！！」

アグルが歯を食いしばるがそれはわずか数秒のことだった。



熱が引いた腕には龍の入れ墨のようなルーン（紋章）が刻まれていた。

キュルケの使い魔召還儀式はこうして終わった。

「さて……」

アグルが周囲を見渡してみると使い魔たちが未だ頭を下げていた。「さ、君たちはもう戻らないと」

アグルが軽く両手を叩いて使い魔たちに戻ることを促す。使い魔たちは各々の主人のところへと帰って行った。

「キュルケ。他の二人はどうなっているの？」

「あつちを」

キュルケがタバサとルイズのほうへ顔を向ける。

アグルもそれにならって視線を移動させる。最初に目に入ったのはタバサであった。

タバサの隣には風竜の幼体がいる。きっとタバサが呼んだものだろう。

アグルと目が合った風竜は手を合わせるかのような仕草をさかんに取っている。

（さて、もう一人はどうかな……）

今度はルイズへと目を向ける。ルイズの周囲はルイズが起こしたであろう爆発で地面のあちこちが凹んでいる。

「ヴァリエールはやっぱり使い魔を召還できずに終わって退学かしら？」

キュルケが心配気味に呟く。しかし、アグルは違うことを感じていた。

「その心配はないね。彼女が爆発を起こす度にある気配が近づいてきている」

「兄様が言うならそうなんでしょうね。ねえ、ヴァリエールが何を召還するか見ていきましょ？」

キュルケとアグルはそのまましばらく留まり、ルイズを見学する

ことにした。

ルイズが召還に成功したのはもう夕暮れ近くであった。

ルイズが最後の力を振り絞って召還の呪文を唱えた瞬間、特大の爆発が起きる。

しばらく煙が周囲に漂っていたが煙がはれてくるうちに爆発の中心部に何かがあることが確認できた。

「さて、戻ろうか」

「え？！確認しないの？」

「すぐに分かることさ。今夜は三人が無事に使い魔召還の儀式を終わらせたことを祝う料理を作ろうか」

アグルはそう言うときュルケをお姫様だっこする形で持ち上げ、空を飛んでいく。

「……………（／／／）……………」

キュルケはアグルの腕におさまって顔を赤くしながらも幸せ満面の笑みを浮かべるのだった。

この日、神は人間の使い魔となった。その使い魔は同じ日に召還されたもう一人の使い魔とともに伝説となっていき、結ばれたヒロインとの物語は長く語り継がれていくことになる。

### 第三話 食事

召還の儀式が行われた日の夜。

アグルとサドラー、ルフが住む家には次々とキュルケの部屋の荷物が運び込まれていた。

キュルケが今夜からこの家に住むこととなったからだ。

本人曰く、

「兄様と私は夫婦だけじゃなく使い魔の関係なのに一緒に住んでいないなんておかしいでしょ？」

ということだ。

昼間は自分が最も慕う相手を使い魔にしてしまったことにとまどっていたのに状況を理解したとたん、その状況を自分に上手く使うあたりキュルケの逞しさと抜け目なさが出ている。

アグルがキュルケの使い魔となったことは既に学院長にも報され、教師が使い魔となることが特例で認められた。

ついでにキュルケとの同居も認められた。

「あれほどの美少女と同居なんてうらやましいのう」という学院長からの嫉妬の視線がアグルには痛かったらしい。

「ふゝむ、マスターとキュルケさんがますます見ていてうらやましい夫婦になっていきそうですね」

「くえゝゝくえ（いいんじゃないの？見た目も中味も良い夫婦なんだから）」

「キュルケさんは本当に十代後半とは思えないほど落ち着いていませすしねえ」

「くうくう（うんうん）」

サドラーとルフが荷物を運びながらニヤニヤと会話を続ける。

アグルとキュルケは正式に夫婦になっていないのに二人が夫婦となることはサドラーとルフにとっては確定事項らしい。

そのころ、当の本人らはどうと仲良く料理を作っており、家の周囲に美味しそうな匂いが漂っている。

「~~~~」

キュルケは上機嫌でアグルの周囲を動き続ける。

今夜からは兄様の家で暮らすのだから当然のことかもしれない。

「上機嫌だね？」

「当然！今夜からは兄様と一つ屋根の下なんだから」

「今までもそうじゃなかった？」

キュルケの実生活の場はアグルの家だ。

自分の部屋にいることは一日の数時間もない。

更に二人は毎晩一つ屋根の下どころか同じベッドで抱き合っている。

今や互いに最高の布団は自分が最も大切に想っている相手だ。

アグルにとっては今までの生活の延長のようなものだがキュルケにとっては違うようだ。

「殿方はそう思うかもしれないけど女にとっては違うのよ？兄様は肝心なところが鈍いわねえ」

「そうなのかい？」

「サドラーヤルフに聞いても同じ答えが返ってくると思うわ」

キュルケはアグルの気を引くためにした苦勞を思い出しながら答えた。

（本当、私、兄様に振り向いてもらうために苦勞したのよねえ）

キュルケは初めてアグルと会った瞬間「私、この人と結婚するんだ」というものを運命的に感じた。

普通、ツエルプストー家の女はあらゆる恋をしながら伴侶を捜すのだがキュルケは例外的に初めて会った異性とと言える男に恋の炎ではなく、愛の炎を一瞬で燃やしたのである。

その後のキュルケの努力はもの凄いものがあった。

アグルに振り向いてもらうために魔法はおろか座学、美容などあ

らゆるものに真剣に打ち込んだ。

それこそ周囲が見えなくなる競馬馬状態と言えるものであった。

そして、アグルと結ばれた後にはそれまで以上にアグルを慕うようになった。

アグルと結ばれたと思っていたがアグルは結ばれたらもっと最高の男であったのだ。

キュルケの精神と身体はもはや性的な意味でもアグル以外には全く反応しない。

そこまで自分の全てを奪った男とこれからはずっと一緒にいられるのだ。実質夫婦と言える暮らしをしていたとはいえ喜びもひとしおだろう。

「ふん ふん ふ〜〜ん」

キュルケは新妻の気分を存分に味わいながらアグルの手伝いを続ける。

「キュルケ、味付けはどう？」

「ん……。おいし〜」

「それじゃあ今日はこの味付けでいこうか」

「これに合うお酒はあるの？」

「ご安心を。ちゃんと準備しているよ」

……この二人、サドラーやルフが言っていたようにどう見ても夫婦だ。しかも、長年つれそつたような阿吽の雰囲気すら感じさせる。ジヨナサンやマーサ、そしてキュルケの両親はこんな二人の様子を見たときにニヤニヤが止まらなかった。

おまけに上の四人、キュルケがアグルにウルウル攻撃をするときや外出の誘いをするときはアグルの後ろで「行け！！」と指さし応援をしたり、アグルがキュルケの誘いに乗ったときはアグルの見えないところでガッツポーズをしていた。

神すらも欺く親心恐るべし！！（特にかーちゃん）

「キュルケさん、荷物の移動は終わりましたよ」

「くう！」

サドラーとルフが荷物の片付けを終えて台所に顔を出す。

「そうかい。それじゃあルフ、ミス・ヴァリエールとミス・タバサ、その使い魔たちを呼んできて。食事はもうじきできるから」

「くえ（了解）」

ルフが踵を返し、トテトテと歩いていく。

サドラーはというとテーブルの準備をしだす。

「だから！早く俺を帰せつて言ってるんだよ」

「帰せつてどこに！？異世界から来たなんてずいぶんとめでたい頭をしてるわね！」

ルイズの室内ではルイズとルイズに召還された人間が言い争いを起こしていた。

ルイズもキュルケと同じように人間を召還していたのだ。しかもアグルのようにメイジ（魔道士）ではなく、魔法の使えない平民と呼ばれる身分の者を。

最初は召還のやり直しを名乗り出たルイズだったが自分が初めて召還した者とは使い魔の契約を行うのが学院の絶対規則。しぶしぶ自分のファーストキスを捧げることとなってしまった。

召還された人間は見たこともない服装に黒髪、黒目の少年で自分を元いたところに帰すようさかんにルイズへ突っ掛かっている。

名前はサイト・ヒラガというらしく、ハルケギニアではなく、異なつた世界から来たという。

二人はルイズの部屋へ向かうときから言い争いを始めている。

「チキュー？ニホン？何それ？そんな国、聞いたこともないわ！嘘をつくならもつと上手く嘘をつきなさい！」

「嘘じゃねえ！」

ヒートアップしていく二人。しかしそんな二人をよそにドアがノックされる音が響いた。

「開いてるわよー！！」

ルイズが不機嫌まんまんて返す。

「くわ！」

ドアを空けたのはルフだった。

ルイズの顔に笑みが戻る。

「あら、なに？ルフ」

「くわ、くえ」

ルフは羽ペンと紙を取り出すと

『ご主人が「召還の祝いのご飯ができたから使い魔を連れて一緒においで」だってさ』

と器用に字を書いてみせる。

「え?! ケント先生が晩ご飯を作ってくれてるの?」

「くう」

ルイズの問いにルフが頷く。ルイズの機嫌はとたんに上向いた。

「行く! ちよつと、あんた。ケント先生が連れてこいって言うからあんたも一緒に来なさい」

アグルが「使い魔を連れてこい」と言わなければ絶対にサイトを連れていかないとつもりだったようだ。

ルイズたちがアグルの家に着くとタバサがすでに来ていた。家の外にはタバサが召還した風竜がおり、家から漂ってくる匂いに鼻をスンスンと鳴らせている。

「んな?! ド、ドラゴンだつて?!」

サイトが慌てふためく。今まで見たことがないのだろう。

「うっさい!!」

ルイズがサイトのすねを蹴って黙らせる。

なぜこの使い魔はいちいち驚くのだろうか? 確かにドラゴンは珍しいが全く見ないというわけでもない。

(とんでもない外れを引いちゃったわ)

これがルイズのサイトに対する評価だった。

サイトはすねからの痛みにうずくまってしまうている。

「こんばんは」

ルイズが先頭を切って元気よくアグル宅へと入っていく。

サイトはルイズがアグルの家に行くこととなつてとたんに上機嫌となつたことを何故かと思つていたが宅内にいた男を見てすぐにはわかつた。

(うわ！ものすごい美青年)

ルイズやサイトをむかえたのは銀髪と神懸かりな顔の造形をもち、身長は180 سانتを軽く超すテレビでも見たことがないほどの美青年だった。

「いらつしやい。ミス・ヴァリエール。今、料理を運んでいるから座つて待つていてね」

「はい！あなた！ケント先生に失礼するんじゃないわよ?!」

アグルとサイトには正反対の態度で接するルイズ。

サイトは再びカチンと来そうになるが、ここは自分らとは全く関係のない人の家なのだということを思いだしてなんとか堪える。

「君が、ミス・ヴァリエールの召還した使い魔かい？」

「この世界的に言うならそうらしいっすね」

アグルに尋ねられたサイトが少々ぶっきらぼうに返すがアグルは軽く笑い、

「僕も使い魔だよ」

そう言つて自らの両腕をサイトに見せる。

アグルの両腕には龍のようなルーンがあつた。

「え?!」

自分以外にも人間が召還されたのがある。サイトは驚いた。

「じゃ、じゃあ！トウキョウウって知っていますか?!」

サイトがアグルに迫ろうとするが再びすねに激痛が走る。

ルイズが再びすねを蹴つたのだ。

「先生に迷惑をかけるんじゃないわよ！」

「だ、黙つていればこのチビ女……。顔は多少出来がいいからって



……」  
再び一触即発な雰囲気となる二人。それを止めたのはサドラーであった。

「そこまでにしなさい。客が騒ぐのはマスターに迷惑となるのですよ」

「んな?!こ、今度はエルフ?!」

サドラーの尖った耳を見たサイトが再び騒ぎ始める。

「黙りなさい!!」

ルイズの鉄拳がサイトに命中し、サイトは伸びてしまった。

「ヴァリエール。なにを騒いでいるの?」

少し遅れてキュルケがやってくる。

「知らないわよ!」

ルイズはドストロスというような足音を立てながらキュルケの前を通り過ぎて食事の間へと向かった。

サイトはルフに引きずられながら食事の間の近くにあるソファに横たわった。

「さて、そこで伸びているミス・ヴァリエールの使い魔は仕方がないから僕たちだけで食事にしようか。サドラー、シルフィードにはこれを持って行って」

「イエス、マスター」

サドラーがとりわけ大きな大鍋を持って外へと出て行く。

「待たせましたね。シルフィードさん」

「きゅい きゅい」

外にはタバサが召還した風竜がご機嫌な声を出していた。シルフィードとはその名である。

シルフィードはサドラーに手を合わせて拝むような態度を見せた後に食べ出す。

「フ……」

サドラーがシルフィードの顔をポンポンと叩き、シルフィードが

気持ちよさげな顔となる。

「喋りたかったら、我々の前だけで喋っても良いんですよ？」

シルフィードの顔が驚きの表情となる。

実はこのシルフィード、話せる竜、韻龍である。韻龍は只の竜よりもずっと珍しく、いることがわかっただけで捕獲のために軍が動きかねない存在だ。

タバサはシルフィードが韻龍であることがわかってから平常時は喋らないように厳命し、只の風竜だということにしていた。

しかし、シルフィードよりも遙かに高位な存在であるサドラーやルフ、そしてアグルにはとくに見透かされていたようだ。

シルフィードがサドラーたちがどういう存在であるか一見でわかったようにサドラーたちもシルフィードを一見しただけでその存在を理解したのだ。

「心配はいりません。他言はしませんよ。それに、あなたのような幼体は私たちが守ってあげます。それが大人の役目ですからね」

シルフィードは召還された当日に存在がばれてしまったことに頭がパニックを起こしそうになっていたがサドラーの言葉を聞いて落ち着いてくる。

どうやら目の前の方たちは自分をどうこうするつもりは全くなく、逆に守ってくれるらしい。

（あなたは、シルフィのお兄様ね）

このとき以後、シルフィードは暇があるとサドラーの側にいるようになる。サドラーとしては年の離れた親戚に懐かれたような気分であった。

「美味しいわ。今夜は本当、ごちそうね」

「おかわり」

「ケント先生、これはなんて食べ物ですか？」

少女三人はやかましく食事を楽しむ。

アグルはというと主役三人の周囲で忙しく動き回っている。

少女三人は食べ盛りでもあるため大量に作った料理が凄い勢いでなくなっていく。

「んん……」

ソファで寝ていたサイトがようやく目を覚ます。

「ようやくお目覚めかい」

アグルがサイト用の食事を持っていく。

「なんだ……夢じゃなかったのか」

サイトががっくりと肩を落とす。ついさっきまでの事は自分が夢を見ているのではないかと思っていた。

だが、目覚めたら現実には残酷だった。自分が今いるのは異世界以外のなんでもない。

「君が今いる場所は君の常識が通じる場所じゃないことだけは確かだ。今はこれでも食べて落ち着くんのだ」

アグルがサイトに食事を勧めるとサイトはそれまでの嫌なことを忘れたいのかがつつき出す。

味を噛みしめる余裕すら今のサイトには無いようだ。

「ちよつと、あなた。せつかく兄様が作ってくれた料理をそんな犬食いするみたいにながつつかないですよ」

声が出た方向にサイトが振り向くと褐色の肌に赤い髪、そしてこれでもかといわんばかりの女の体型をした超美少女が飛び込んでくる。もちろん、キュルケである。

「……………」

サイトはキュルケの美少女ぶりに惚けてしまった。

自分を召還したと言い張るルイズも顔だけ見ればかなりの美少女だがキュルケは明らかに美少女ぶりが数段格上だ。しかも身体全体から漂わせる雰囲気もルイズよりはるかに上だ。

「……………」

正に言葉が無いサイト。反応がないことにキュルケが心配気味な顔となる。

「どっしたの？」

キュルケが目線をサイトと合わせるがそれでも反応はない。

「ツエルプストー！何、人の使い魔にちよっかい出してるの！」  
ルイズが突っ掛かるが当のキュルケは何もしていない。

「どうやらキュルケさんの美人っぷりに言葉を失ってしまったようですね」

（コクコク）

「くうくう」

サドラーが状況を理解し、タバサとルフが同意するかのよう頷いた。

「この！戻ってきなさいよ！」

おもわず怒りの拳をふるうルイズ。しかし、アグルがルイズの腕をつかんで止める。

「やめるんだ。もし、君が同じ事をされ続けられたら我慢できるかい？」

「でも！こいつは自分の身分もわきまえずに！」

「それを僕の前で言うつもりかい！？僕だってケント家に養子に入っていないかったら只の平民だ。君は只の平民に家庭教師をして貰ったんだよ？」

アグルが厳しい目でルイズを見る。ルイズの手から力が抜けていき、気まずい間ができてしまう。

「さ、彼が戻ってくるまではまだしばらくかかりそうだから食事を再開しましょう！今夜は兄様のごちそうがまだまだあるんだから」

「くえ！（賛成！）」

キュルケの提案にルフがのっけてくることで場の雰囲気は一気に和む。

アグルはルイズの背中を軽く押してあげ、フツと微笑みながら食事を続けるよう促す。これまでのことは忘れようということだろう。（どうしてケント先生じゃなくてあいつだったのかしら……）

同じ人間を召還するならツエルプストーのようにアグルを召還したかった。

だが、運命は自分にサイトを召還させた。

ルイズは軽く肩を落としながらも食事を再開する。

「ミス・ヴァリエール。人間を召還したからと言って落ち込むことはないよ。彼は他の使い魔なんて比較にならないほどの凄い使い魔だから」

「なぜ、そんなことが分かるって言うんですか？」

「それは秘密さ。でも、近いうちにわかるよ」

アグルがルイズに落ち込む必要が無いことを説明しているとき、サイトはようやく意識を戻したようので食事を再開させた。

「おかわり！！」

「くえくえ（はいはい）」

サイトが出した皿にルフがおかわりをもって返す。

おかわりをもたらったサイトはようやく料理の味を感じたのか今度は一口いれることに感慨の表情となっている。頭に天使の輪があるように見えるのは気のせいだろうか？

食事は夜遅くに終了して一同は解散となる。

ルイズとサイトは無言のまま歩いていく。二人はきつと部屋に戻った後に一悶着どころじゃないくらいの喧嘩があるだろう。

タバサは一人で自室に戻っていく。シルフィードはというと今夜はアグルの家の側で寝たいらしい。

「それじゃ、僕らも寝ようか」

「ええ」

アグルとキュルケは一緒に入浴した後いつも通り一緒にベッドに入る。

「ふふ……今夜からはず〜とと兄様と同じ家……。よろしくお願います。兄様、いえ、旦那様」

「やれやれ、君に捕まっちゃったなあ……。なんだか僕らの両親の策略に見事にはまった気がするよ」

アグルが苦笑気味な顔となって自分の掛け布団となっているキュ

ルケを撫でてあげる。

だが、嫌な気分などあるわけがない。自分はキュルケを、大切な伴侶と言つて良い女性を守つてこの世界で生きていくのだ。

「これからもよろしくお願いね。旦那様」

「うん。僕は君を一番大切にするからね」

「ああ……。今夜は兄様と初めて結ばれたときと同じくらい嬉しい……」

キュルケは今宵から毎晩同じ幸せな気分を味わいながら眠ることとなる。

学院に最強の夫婦が誕生した日であつた。

そのころのルフとサドラー。

二人はカードゲームに興じながら寝酒を楽しんでいる。

「くく、くけ（ところで、僕らもそろそろ良い人が欲しいねえ）」

「そうですねえ。ですが私たちはマスターのように非の打ち所がない存在ではありませんしねえ」

「くわえ、くるる（今回、召還された使い魔で気の合いそうな友人はできるかな）」

「明日は二学年の生徒たちが使い魔と親睦を深める一日だそうです。広場をうろついてみましょうか」

「くひゅ、くきよ（楽しみだねえ。今度はどんな使い魔が召還されているんだろう）」

二人は明日のことを楽しみにしながらカードゲームを続ける。

## 第四話 伝説

使い魔召還の儀式より一週間ほどがたった。

儀式直後は学院全体がやかましかったものだが、それも落ち着きだしている。

今朝もアグルとキュルケは二人で朝ご飯を作っている。

BGMはキュルケの鼻唄だ。

「　　」

キュルケの歌声は心地よく響き、外ではサドラーとルフがBGMに合わせるかのように体操をしている。

「くえ！くえ！く〜く〜、く〜く〜（おいつちにい、さんし）」

「よ、は、せい〜、や」

亜人とペンギンの体操は非常にシユールであり、おかしくもあるがこれがいつもの光景だ。

まもなく、朝食のメンバーがそろそろ時間である。

「おはよう」

「きゅい」

学院のほうからタバサとシルフィードがやってきた。

「おはようございます。タバサさん、どうぞ中へ。シルフィードさんは外で待っていてくださいね」

「わかった」

「きゅい〜」

タバサが家の中へと入っていき、シルフィードはアグル宅の近くへと腰を下ろす。

ルフとサドラーがタバサの後ろをついていき、朝食の時間となる。

「ああ……兄様の食事を毎食食べられるなんて私、幸せ……」

（こくこく）

キュルケとタバサは極上の料理を朝から好きなだけ食べられる幸

せをかみしめる。

ちなみにキュルケは学院の食堂で食事をしたことは片手の指の数もない。

学院に来た当日からアグルの側で寝起きしているし、昼食も夕食もアグルと一緒にとっているのだから。

朝食の時間は笑みにあふれたものとなり、キュルケとタバサは今朝も上機嫌であった。

「ん……。兄様、行ってきます」

「いつてらっしゃい。授業、がんばってね」

朝食後、アグルとキュルケは「行ってきますのキス」をすませて仕事と授業へ向かう。

「二人ともうらやましい……」

タバサがキュルケをうらやましそうにジト目で見る。

「フフ……。タバサも私みたいに兄様を見つければすぐにこうなれるわよ」

「なら先生を譲って。先生に兄様になつてもらいたい」

「いゝゝゝや！兄様には私一人だけを見ていて欲しいの。私だって兄様しか殿方が見えないんだから」

二人は恋愛話を盛り上げながら教室へ向かいだす。

後ろにはシルフィードとルフがついて行くのだった。

ルフがキュルケの後ろをついて行くのは一緒に授業へ出るためだ。

普通、使い魔は主と一緒に授業を受けるものだが、教師であるアグルは受け持つ授業がある。

よってキュルケと授業に出ることができない。その代役である。

サドラーはというと他の使い魔とともに学院の雑用をしている。

(主に力仕事や教師の使い魔たちをまとめる仕事)

午前中の授業時間は静かに過ぎていくかと思われたが、キュルケと同じクラスのルイズが授業中に連金の失敗魔法で校舎を揺るがすほど爆発を起こしてしまい、ちょっとした騒ぎとなってしまった。



昼食の時間。

爆発があつた教室ではルイズが盛大に散らかつてしまった机やガラス破片の片付けをルイズ、サイト、ルフが行っている。

「ありがとう……ルフ」

「くえくえ」

ルフは「気にするな」と言っているかのように手を振ると箒とちりとりを手に片付けを続ける。

（なぜ私だけどんなに頑張っても魔法ができないの……）  
ルイズの顔からは完全に覇気が無くなっている。

いつもいつも失敗魔法で爆発を起こして周囲の生徒からはバカにされているが今回の爆発は連金の失敗だけでなく、近くでルイズを指示していた教員に死ぬかもしれないほどの傷を負わせてしまった。

傷を負った教師は大急ぎでかけつけたアグルとアグルが持つてきた薬によつてことなきを得たがルイズはというとアグルと共に来た別教師に罰として掃除を言い渡された。

下手すれば自分は殺人犯になるかもしれないなかつたのだ。これはかなり効いたようである。

（なるほど……ゼロか）

サイトはルイズが「ゼロ」と言われる理由を理解した。ルイズは魔法の成功率がゼロとしか言えないから「ゼロ」という二つ名をもっているのだ。

「ゼロと言われる理由がわかつたよ」

サイトが掃除の手を止めることなく呟く。言葉の調子から少しだけ同情しているのだろう。

「同情なんていらないわよ！」

「俺が気に入らないのはわかつているが、同情ぐらい受け取りな。みんなができるのに一人だけできないことなんて、俺だって何度も経験していることなんだからな。そんなとき、誰も同情してくれないというのは悲しいを通り過ぎて苦しいだけだ。そんな態度だと本

当に苦しいときに誰も見てくれなくなるぞ」

「またもサイトにつつかかろうとするルイズだったが逆にサイトに一括される。」

ルイズはしばし考え事をし、無言で自分も片付けに加わり出す。

昼食の時間。

アグル、キュルケは自宅へと戻って昼食をとっている。傍らにはもちろんタバサがいる。

外ではサドラーがシルフィードと共に昼食をとっている。

シルフィードと一緒に食べたいとサドラーにねだったのだ。

「やれやれ、すっかり懐かれてしまいましたね。私のどこが気に入ったのです?」

「きゅい〜」

シルフィードはサドラーの問いに答えず、上機嫌で昼食を頬ばる。

「二人とも、茶が入ったよ」

室内の三人は食事を終えたようで食後の茶を楽しみだしていた。

その茶はキュルケが今まで飲んだことのない味をしていた。

「ちょっとした苦みが口の中に残り、今までの食事の油などを一緒に流していつてくれそうな味だ。」

「兄様、これはなんていうお茶?」

「アール・グレイっていう紅茶。今日のような食べ物の食後に合うでしょ?」

今日の昼食はというとサンドウィッチにサラダ、ソーセージであった。

アール・グレイのほのかな苦みが良い感じに味を締めくくる。

「……気に入った」

持参した本を読んでいるタバサが呟き、空になったカップさしだす。

「それはどうも」

アグルは手慣れた手つきで二杯目を注ぎ、レモンの輪切りを添え

てタバサに返す。

「これはどうするの？」

「しばらく浮かべてから飲んでごらん。新しい味が楽しめるよ」

タバサは言われたとおりにレモンの輪切りを浮かべて飲み出す。

「兄様、私もそれで飲んでみたい」

「はい」

キュルケも1杯目を空にし、アグルにカップをさしだす。

三人の周囲はゆったりとした雰囲気を満たしていた。

しかし、突然、勢いよく部屋の扉が開き、訪問者がやって来るところで雰囲気が変わる。

訪問客はルイズであった。後ろにはルフもいる。

「ケント先生！助けてください！」

「ん？どうしたんだい？」

「サイトが貴族と決闘しているんです！」

「まずは説明してくれるかい？」

ルイズが言うにはルイズとサイトがようやく掃除を終え、食堂に行くところある貴族の少年が学院付きのメイドに服を汚してしまったということで責め立てている場面に出くわした。

それを見たサイトが貴族に止めるよう進言したが貴族はそれを機に矛先をサイトに変え、決闘を言い出したというのだ。

サイトも貴族の態度が気に入らなかつたのか決闘を受けてしまったという。

「サイト君に喧嘩を売った貴族の名は？」

「ギーシュ・ド・グラモンです」

「ギーシュ？ああ……自分を薔薇にたとえている身の程知らずな軍人家計のお坊ちゃまね。薔薇じゃなくて馬鹿と言った方がいいわ」

サイトに決闘を売った貴族の名を聞いてキュルケがあきれ気味に呟く。

キュルケは入学したばかりの頃、ギーシュに口説かれたことがある。

間違いなく学院で最高の美少女なのだから自称色男の血が放つておかなかつたのだろう。

だが、アグルという男しか見えないキュルケに一刀両断にされてしまった。

「ミスタ・ケントに勝てる男になってから出直して来なさい。私は身も心もあの人だけのものよ」

という言葉はキュルケが男を振るときの常套手段である。

手ひどく振られたギーシュはしばらくおとなしくしていたが、やがて綺麗さっぱり忘れてしまい、自分を薔薇にたとえてこりもせず女を口説き続けている。

もつとも、ある一定以上のいい女はまったく捕まえることができていない。

特定の彼女がいるらしいが別の女に目移りするのは遺伝子に擦り込まれた業なのか。

「それで？双方とも引く気がないの？」

「はい！二人からは止めようという気が全く感じられません」

「ふうむ……今のままではサイト少年が一方的にやられるね」

魔法が使える貴族ギンシュに使えない只の平民サイト。

喧嘩になつたら常識的に考えてサイトがやられる。

傭兵などのように戦いなれている人間なら平民でも貴族に勝てるかもしれないが、戦いを知っていそうにないサイトが魔法使いに對抗できるか？と言われれば無いだろうとしか言えない。

アグルが腕を組んでしばし考える。

「よし、サドラー。倉庫にある剣を持って行ってあげな。サイト少年に渡すんだ。渡す手段は君に任せる。僕はルフと一緒に学院長のところに行つて来る」

「イエス。マスター」

ルイズの後ろにはいつのまにかサドラーもいた。

サドラーはアグルからの指示を了承すると家の倉庫へと向かう。

「先生！そんなことより先生が二人を止めてください！」  
ルイズがアグルに食い下がる。

アグルはルイズの知る限り最も強い魔法使いだし学院でも最強と名高い魔法使いだ。

アグルの力は授業の節々で生徒も見ていたので生徒の誰もがアグルの強さを知っている。

おまけに若かりしころは「烈風」という異名でトリスティン最強と恐れられた女戦士であるルイズの母ですらアグルと闘ったとき、手も足も出せなかったのだ。

今はキュルケの使い魔とはいえ、相変わらず最強の名をほしいままにしている。

それほどの人間が行けば万事収まるはずだ。  
いざというときは脅せば良いのだから。

「その必要はないよ。サイト少年が武器を手に入れば戦いは瞬く間に終わるから。ミス・ヴァリエール。君はサドラーと一緒に広場に行くといい。君の使い魔の力をかいま見ることができよ？」

だが、アグルはなぜか自分が出る必要はないと言い、ルフと共に学院長の部屋へと向かった。

「あ！先生！！」

ルイズはアグルの後を追おうとしたが

「兄様の言うことが信用できないの？あなた、それでも兄様に家庭教師をしてもらった女？」

キュルケがアグルを信じることができないのか？とルイズに軽く睨みを効かせる。

「ぐ……」

ルイズには何も言い返せなかった。

なぜなら、アグルの言うことに今まで嘘は一つもなかったのだから。

「ルイズさん、行きましようか」

ルイズたちのところに、サドラーが戻ってきた。

サドラーの手には血のように真っ赤な刀身と呪いでも放っているかのように禍々しい雰囲気を放つ、長さ1メートルほどの大剣が握られていた。

「な、なに?! そのものすごく怖い剣は?」

ルイズは剣が放つ雰囲気に思わず腰を引いてしまった。

サドラーの持つ剣は「サタンサーベル」という名の魔剣である。

アグルが数ある世界を旅していたときに滅ぼしたとある組織から戦利品として持っていたものだ。

耐久力が異常に高く、切れ味も全く落ちないため、アグルに振るわれて多くの血を吸ってきた。

「サタンサーベルといえます。伝説に出てくる剣もこの剣に比べればおもちやも良いところですよ」

サドラーは軽く剣の紹介をすると決闘の場へと歩き出し、キュルケ、タバサ、ルイズがサドラーの後をついて行く。

学院の庭ではサイトとギーシュによる決闘が行われていた。

内容はというとギーシュの一方的なワンサイドゲームだ。

ギーシュが得意とする土系統の魔法で創り出した青銅の彫像ゴレムがサイトを叩きのめしている。

普通、金属で殴られた人間は簡単に死んでしまうが、サイトは死んでいないあたり、ギーシュが適当に遊んでいるのだろう。

「いい加減に負けを認めたらどうだね?」

「……………」

サイトはギーシュの勧告に睨みで返すが、足下はふらついているし体のあちこちは内出血を起こしている。

口や鼻からは血が出て歯を食いしばっていないと今にも意識を失いそうだ。

「答えることもできないかい? ならば!」

ギーシュはゴレムを操り、サイトに最後の1撃を食らわせようとするが、

「おやめなさい!!」

低いが良く通る声が突如広場に響く。声の発生源はサドラーであった。後ろにはルイズ、キュルケ、タバサの姿もある。

「う?！」

サドラーの姿を視界に入れたギーシュが思わず身じろぐ。ギャラリーにも後ろに身を引いている者がいる。

ここ、ハルケギニアではサドラーのような亜人は以前書いたように一般的に恐れられる存在だ。

サドラーはアグルに従っているため、安全と生徒全員が教師から聞かされているが細身とはいえ図体がでかいし迫力も満点だから怖いものは怖い。

しかも、サドラーの手に握られている剣が息を詰まらせてしまいそうな雰囲気を持っている。

嫌なオーラと呪いでも出ているのかと錯覚してしまいそうだ。

ギーシュの操るゴレムもギャラリーと共に動きを止めてしまっていた。

「決闘だというのに内容は只の弱い者いじめですか。同族の弱い者虐めなんて虫でさえしないことですよ」

サドラーが怒り気味にギーシュを睨む。

「ひぐ?!」

ギーシュが恐怖に体を硬くする。覇気も一瞬で無くなり、まさに蛇に睨まれた蛙の状態であった。

「どうしました?今までの余裕はどこにいったんです?なんなら、私が相手しますよ?決闘を買ってあげますよ?どつちかが死ぬ本当の決闘を!あなたから決闘を言い出したのだから死んでも後悔は無いんですよね?」

ギーシュは勢いよく首を左右に振る。

身長2メートルはあるであろう亜人が禍々しい剣を持っているのだ。「この亜人に決闘を売ったら殺される」と本能がつけている。

ギーシュが軽々しく決闘を言い出したのは相手が平民だからとた

かをくくっていたからだ。

まさか学院で只一人の亜人が出てくるとは思いもしなかった。  
(たかが平民に決闘を売っただけなのになんでこんなふうになるんだ)

ギーシュは軽々しく決闘を言い出した自分に後悔をしましていた。  
「そうですか。決闘を売ってくれますか」

サドラーはギーシュが恐怖しているのをわかっていながらわざと  
ギーシュの前へと進み出そうとする。

今度は亜人による一方的な対決が起きるのか？周囲で見っていた多くの者が思った矢先、サドラーを止める者がいた。

半グロツキー状態のサイトである。

「……………」

サイトは残っている力を絞ってサドラーの服をつかみ、更に目に力を込めてサドラーの顔を凝視する。

その目は「俺がやる！」と語っていた。

「……………これを使いなさい。あなたの左手が全てを教えてください」

サドラーはなにやら意味不明なことを呟くと地面にサタンサーベルを突き刺した。ギーシュへの脅しの時間としてもちょうど良い頃合いだろう。

「貴族の少年よ。こっちの彼はまだやる気のようにです。彼には私が持ってきた武器を使わせませぬ。あなたが魔法をつかっているのだから少年が剣ぐらい使っても良いですよ？私は見届け人にまわりませぬ」

ギーシュが先ほど以上の速さで首を上下に振る。

(うまく状況を運べましたね)

サドラーは自分が戦うつつもりなど最初からなかった。ギーシュを脅したのはサイトに武器を持たせるための間を用意したかったからに過ぎない。

サドラーが踵を返し、決闘の場から去っていく。



「サドラー！なんであなたが止めてくれないの?!」

サドラーとギーシュのやりとりを見ていたルイズがサドラーに詰め寄るがサドラーは自信たっぷり返す。

「もう、勝負は決したからです。あの決闘はサイト少年の勝ちです」「先生といい、あなたといい何でそう断言できるの？サイトは平民なのよ?!」

「理由はちゃんとあります。とにかく見ていなさい。本当に最悪の事が起きそうなときは私が無理矢理にでも止めます」

「本当ね?!約束よ?!」

ルイズはサドラーの言うことを信じ、この戦いを見守ることにした。

(どうせ、今のままでは目の前の奴に殺されるんだ……。めい一杯抵抗してやる)

サイトは蠟燭が燃え尽きる寸前のような体力しか残っていない身体をやけくそ気味に起こして目の前の大剣に手を伸ばす。

「うぐ!」

サイトが柄を握った瞬間、左手のルーンが若干光り、長さ1メートルぐらいある大剣が簡単に抜かれた。周囲はサタンサーベルの放つ雰囲気再び呑まれる。

が、肝心のサイトは全然構えになっていない。

「ふ、ふん!その剣はかなりのものであることがわかるが君のようなへっぴり腰で大剣を扱えるのかな?」

ギーシュが強がり言いながら再びゴーレムを動かし出す。

「うわあああああああ!」

サイトがサタンサーベルを無我夢中で振り下ろす。

金属同士がぶつかる音と眩しい光が周囲に響いた。

音と光が発された一瞬後にはサタンサーベルの刀身を半分ほど地面に埋まらせたサイトと動きを止めたゴーレムがいた。

直後、ゴーレムが頭頂から真っ二つに割れていく。ゴーレムは青

銅特有の鈍い音を立てながら崩れた。

周囲は「おおっ」と驚きの声に包まれる。

「へ、へへ……ざまあみろ」

サイトが口から血を流しながらわずかに微笑んだ。だが、決闘はまだ終わらない。

「たかが一体で決闘が終わるかと思ったのかい？」

ギーシュは残っている魔力を全て使ってバラの花のような杖を振り、ゴーレムを作り出す。今度は6体のゴーレムがサイトを囲む。

「おおりゃあー！」

サイトが自分を中心としてサタンサーベルで円を描く。

ゴーレムが全て胴体から真つ二つにされてあっという間にガラクタとなる。

「な！な……」

ギーシュは訳がわからなかった。あの平民はなんだと言うのだ？あの剣はなんなのだ？

「貴族様よ……。続きはもう無しかよ」

サイトが足下をふらつかせながらギーシュを睨む。新たなゴーレムを作るうえにもギーシュにはもはや魔力がなかった。

さつき6体のゴーレムを作ったときに魔力を使い果たしていたのだ。

「無い……。僕の負けだ」

ギーシュが負けを認めてしまう。平民が貴族に勝ってしまった瞬間だった。

「そうかい……。それじゃあ今度は俺の攻撃だな」

サイトはこれまでやられた恨みを返すのは今だとばかりに剣を構えてギーシュのところへと歩き出す。

ギーシュの顔が恐怖に染まる。あんなとんでもない切れ味の剣に切られたら人間などひとまりもないことぐらいすぐに想像できる。

「ま、待ってくれ！僕は負けたと言ったじゃないか！？決闘は終わりじゃないのか？！」

「何を言っているのか聞こえないね。もっと来いって態度に俺には見えるね」

サイトはギーシュの願いを却下してギーシュへと近づいていく。

「ひいひいひいひい?!」

ギーシュは逃げだそうとしたがサイトがサタンサーベルを振り下ろす。ギーシュは逃げようとしていたところに背中を切られてしまった。

「うあああああああ!?!」

傷は深くないが大きく切られた背中から血が出る。

「く、来るな!来るなあああ!」

背中 of 痛みにギーシュは死というものを強烈に感じて手をジタバタと振る。

「ふん!」

サイトがサタンサーベルを横風振る。サーベルはギーシュの右掌に一直線の道を作った。

「う?!!うわあああああああ?!!」

自分の掌から大量に出血する光景を見てしまったギーシュは顔を今まで以上に恐怖で青くしてしまう。

周囲は殺人が起きそうな雰囲気騒然となる。

「ひいひいひいひい?!」

ギーシュがサイトを見るとサイトの表情は人をいたぶることを楽しんでるものだった。

その顔はさつきまでの自分の顔と同じものだったのだがギーシュにはわからなかった。

サイトがギーシュに向かって再び剣を振ろうとしたとき、何者かがサイトの腕を掴む。サドラーであった。

「もうよしなさい。それ以上やったらあなたは目の前の貴族以下の人間になるのですよ。それでいいのですか?一時の感情で全てを決めてしまっはいいけません」

サドラーの言葉と目にはなにか悲しいものが混ざっていた。

「……………」

サイトの手から力が抜けていく。サイトはそのまま気を失った。

「決闘はここまでです。キュルケさん、彼にはこれを」

サドラーはキュルケに即効性の傷薬（秘薬という）を渡してギーシュを治すよと言つと、サイトとサタンサーベルを担いでルイズと共に戻っていく。

流血騒ぎで大騒ぎとなっていた広場は最悪のことが起きなかったことよって落ち着きを取り戻し、ギャラリーも去っていく。

後には未だ恐怖で身を震わせるギーシュとキュルケたちだけが残る。

決闘の勝敗などは綺麗さっぱり忘れられていた。

「あなた、サドラーに感謝しなさい。サドラーが止めなかったらあなたは完全に死んでいたわ」

キュルケはアスラに言われたとおり即効性の傷薬を使ってギーシュの傷口をふさぎ、異常がないことだけを確認して去っていった。

ギーシュは初めて味わった本当に死ぬかもしれない恐怖というものに長く身を震わせるのだった。

#### 学院長室

部屋の主で立派な顎髭が特徴の学院長であるオスマン、そしてアグルは室内にある外界を映す鏡で広場の様子を見ていた。

決闘はアグルの予想していたようにサイトの勝ちで終わったと言つて良いだろう。

「あなたの言つたとおりになつたか……」

「そのようですね。」

オスマンの呟きにアグルが頷く。

「あの少年のルーンはやはりあの伝説のもの一つに間違いないよつです」

「あなたが言うのなら間違いはありませんまいのう」

オスマンは学院内ではキュルケ以外にアグルの正体を知る只一人

の人物だ。

むろん、アグルの過去も知っている。

このハルケギニアでどういうことをしたのかということも。

「とにかく、今はしばらく様子を見るのが良いと思います。ミス・ヴァリエールと彼の面倒は僕が中心で見ます」

「そうしてもらえるとありがたい。こっちは伝説のルーンを持つ者が現れたということが漏れでないように手をつくしますでの」

アグルとルフは学院長に頭を下げ、退出する。

「おお！ケント先生。学院長はいらっしゃいますかな？」

アグルの戻る方向からコルベールが駆けってくる。手には何かの本が握られている。

「いますよ。今は何やら考え中なのですが」

「そうですか。それでは！」

コルベールは短めに会話を終わらせ、進行方向へと走っていった。オスマンの部屋を訪れたコルベールはサイトの持つルーンにたいしての説明を行い出すのだが

「ケント君から聞いたわい」

と言われ、更にしばらくはどうするのかもすでに決まっていたことに肩を落としてしまったそうだ。

「さて、他の伝説の使い魔は呼ばれているのかな？午後はサイト少年の看病でつぶれそうだね」

「くうくう」

アグルの呟きにルフが頷く。色々なものが動き出そうとしていた。「でも、僕の一番の役目は奥さんを守ることが」

アグルの言葉から自然と「奥さん（キュルケ）」という言葉が出ていた。

アグルにとってはもはやキュルケは最高の奥さんなのだろう。

それを聞いたルフは（・・・）ニヤニヤを深くする。

(ご主人に本当の春が来たね~~~~~) by ルフ)

## 第五話 事件

サイトとギーシユの決闘が行われて数日後。

サイトは決闘の後、治療のためアグル宅のベッドに縛り付けられていた。

ギーシユの操るゴーレムにさんざん殴られた身体のおちこちが打撲や打ち身、内出血を起こし、水の秘薬を使用しても一度には回復しきれなかったからだ。

「なあ、ケント先生。なんでもつと水の秘薬つてやつを使ってくれないんだよ？あれをもつと使えば俺の傷なんてたちどころに治るんじゃないのか？」

サイトは自分がさつさと治る方法をアグルが行ってくれないことに不満を漏らす。

サイトはルイズの失敗魔法で大怪我をした教師がたちまちのうちに治っていくのを見ている。

そのときに使われた秘薬の量と比べて自分に使われている量は明らかに少ない。

なぜ自分にもそれぐらい使ってくれないのか？という疑問がサイトの中でわき起こっていた。

「馬鹿を言わないでください。水の秘薬というのはいろいろな薬を融合させて作るのです。それを作るのにどれだけ費用がかかると思っているのですか。あなたに使った分だけです。に我々ヶ月分の食費を上回っています！それに作り置きしていた秘薬はこの前、大怪我を負った教師とあなたが殺そうとした貴族にほとんど使っています！」

サイトの問いに答えたのはアグルではなくアグルの近くで作業を手伝っていたサドラーであった。

「マスターはあなたになにも求めずに治療してくれているのですよ？！あなたは秘薬を作るだけの金を出してくれるというのですか？」

なんにもしていないあなたにマスターが文句を言われる筋合いはないかありません！むしろ感謝しなさい！！ベッドで寝ているだけのあなたが偉そうに言うな！それになんですかその言葉は！！あなたは目上に対する言葉遣いも知らないのか？！この常識なしめ！！」

サドラーは容赦なくサイトを責め立てる。

主人が手を煩わせているのに感謝の態度も見せずに施しを受けているサイトの態度が気に入らないのであろう。

おまけに自分の思い通りに行かないからと言葉遣いまでぶっきらぼうになるガキぶりも気に入らないのだろう。

サイトはサドラーの剣幕に押し黙ってしまった。

「サドラー、頭に血を上げるものじゃないよ。彼の状況を考えてごらん。彼は僕と違って見ず知らずのうちいきなり召還されて従わされ続けているんだ。不平不満はどこかで出さないと。サイト君、つまりはそういうことさ。水の秘薬を使おうにももう僕の手元にはないんでね。悪いが後は君の回復力にたよるしかないというわけさ」  
アグルはサイトの傷の様子を看ながらサドラーにやんわりと注意する。

「ところで、君はこことは違う世界から来たそうだね」

「信じてくれるんすか？」

「目の前の人物はそう言っているんだからね。ただ、それを証明するものを今の君は持っていないからミス・ヴァリエールにも信じてもらえないというのが現状かな？」

「確かにそうっすね。俺が異世界から来たことの証明になるものが見つかればいいんすけど」

アグルはサイトが異世界から来たということを話題にしながらサイトの具合を見る。

（もつとも、アグル自身は異世界を平気で行き来できるだけの力を持った存在だが）

アグルの見たところサイトの傷の具合は外出ぐらいい問題はくらくらいに回復していた。



「ふうむ。外出ぐらいなら問題ないんじゃないかな。サイト君、君は今日で退院だね」

アグルがサイトの診察具合をまとめ、後でやってきたルイズに伝える。

「そう。それじゃあ明日はトリスタニアに行くわよ。ご主人様らしく剣を買ってあげるわ」

サイトの外出許可を得たルイズは翌日の虚無の曜日、現実世界で言う日曜日にサイトを連れてトリステインの首都、トリスタニアへ買い物へ行くこととなった。

「それじゃ、僕とキュルケとサドラーは領地へ戻ろうか。今は夕方だから屋敷でも僕ら用のご飯を作ってくれているだろうし」

「ええ。お養父様やお養母様と楽しく過ごさなきゃ」

ルイズたちを見送った後、アグルとキュルケが外出の準備をしだす。

虚無の曜日、アグルとキュルケはケント夫妻の元で過ごすのが普通である。

屋敷では領民への医療行為を行ったり、農耕の指導などを行って一日を過ごす。

二人の様子は領主自慢の息子が自慢の嫁を連れて帰ってきた光景にしか見えない。

容姿も頭も満点で基本的に人を差別しないキュルケは屋敷の使用人や領地の民たちに「若奥様」と呼ばれている。

キュルケにとって虚無の曜日はアグルの妻であることを存分に味わえる日なのだ。

（アグルが初めてキュルケを連れて領地に帰ったときは祝いで大騒ぎになったそうだ）

「ルフ、君はどうする?」

「くけくけ、くお、くぎゅ（僕はルイズちゃんと一緒に街へ行くよ。二人の護衛もかねてね）」

ルフはそう言うところルイズの部屋へと向かった。きつとルイズに泊めて貰うつもりなのだろう。アグルとキュルケは着替えだけ持つと家の鍵をロックし、ペガサスとなったサドラーに乗ってケント夫婦のところへと向かう。

ケント夫妻の屋敷。

「んむ。なかなか良い感じに育ってきたな。あと数週間もすれば見事な花が咲きそうだ」

屋敷の庭ではジョナサンが庭木の手入れを行い、

「今夜は少し肉類を多くしましょうか。みんな、アグルの料理には勝てないかもしれないけど良い料理を作りましょう」

マーサは使用人たちと共にアグルやキュルケと食べる夕食の準備をしている。

その光景は趣味を楽しむ楽隠居そのものだ。

使用人たちも若旦那夫婦が戻ってくる日ということではりきっている。

「お養父様〜」

料理がもうじきできるころ、ジョナサンを呼ぶ少女の音が上空より聞こえた。

ジョナサンが見上げたそこにはサドラーに乗った息子夫婦がおり、キュルケが手を振っていた。

「おや、おかえり。夕食ももうじきできるころだよ。みんな、アグルたちが戻ったよ」

ジョナサンが笑顔で二人を迎える。呼びかけによって屋敷のほうからも使用人が二、三人飛び出てきた。

「お帰りなさいませ。若旦那様。若奥様」×多数

使用人は手早くアグルらの荷物をサドラーから下ろし、ジョナサン、アグル、キュルケを先導する形で屋敷内へと入っていく。

「明日の予定だけど、二人はどうするつもりなんだい？」

「明日は医療行為をするよ。キュルケ、手伝って貰えるかい？」

「任せて」

明日の夫婦の予定は医療行為を中心に行うようである。

夕食は屋敷の者全員で楽しく行われた。

食後、アグルとジョナサンは二人で晩酌、女たちは男の話で盛り上がる。

「お養母様、兄様と私が仲良くやっていける秘訣って何ですか？」

「キュルケさんに教える事なんてないわよ。あなたたちはもう自然に夫婦が仲良くやっていける方法をできているじゃない。それよりも私は使用人たちにアグルのようないい男を捕まえる方法を伝授してあげてほしいわ」

「そうですね、若奥様。私たちにアグル様のような殿方を捕まえる方法を教えてくださいよう」

「そんなこと言われても私は一目見たときから兄様しか見えなくて……兄様になんとか振り向いて貰いたいという想いだけで頑張っただけだし」

女たちは恋話の標的をキュルケに定め、詰め寄る。

「やれやれ、あつちは君のことで盛り上がっているねえ」

「嬉しいんだか嬉しくないんだかよくわからないことだけどね」

一方、男二人は静かに酒を酌み交わしている。つまみは夕食の残りだ。

「つくづく思うが息子と飲む酒というのはいいものだね。ゆったりとした気分になれるよ」

「そうだね。僕も永い間を生きているけどこういう経験はこの世界以外では全くないからいい経験をしていると思うよ。」

「父親としては息子のほうがずっと年上というのもなんだか変な気分だけどね」

ジョナサンとアグルはしんみりとした会話を続ける。

血のつながりが無いことなど関係ない親子の絆が感じられる会話だった。

「明日、仕事が終わったらクラークさんのところに墓参りに行くよ。もしかしたらこの世界の僕、アグルにあたる人だったのかもしれないから」

「そうかい。もし、クラークが生きていたらやはりキュルケ君を妻にしていたのかな？」

「ジョナサンとマーサの息子、クラークは何をやらせても一級品の本当に自慢の息子だった。」

親に対しての気遣いも忘れず、夫婦は自分たちが死んでしまった後もまったく心配は無いと思っていた。

だが、出来すぎた人間というのは長生きできないことが多い。この世界の神はクラークをすぐにも呼びたかったのか、クラークは流行病であっさり死んでしまった。

それから数年後、アグルはこの世界へとやって来たのである。

「クラークがこの世界の君にあたる人だったかもしれないか……確かにそうも思えるな。君とクラークはあまりにも似すぎているからな」

「父さんはクラークさんを失った直後、クラークさんに生き返ってほしかった？」

「当然さ。自分の命と引き替えて息子が生き返るのなら親は迷わずそうしているよ。でも、我々人間は君と違って自然の前には無力だ」「そう思っている人の息子に生まれたクラークさんはきっと死後の世界で父親と母親のことを自慢していると思うよ」

アグルがジョナサンの空になったグラスに酒をそそぎ、ジョナサンはフツと笑いながら酒を口に運ぶ。

「今夜の酒は特別に美味しいな……」  
ワインを飲み干したジョナサンが複雑な笑みを浮かべた。

翌日、屋敷の診療所は大忙しであった。

今の時期は春であるため、畑仕事の道具で怪我をしまったり、荷物運搬中の事故などが多い。

アグルとキユルケは朝食をすませると医療用の服装に着替え、（キユルケは看護婦用ミニス力姿で）怪我人や病氣治療にあたりだす。サドラーはというと屋敷の力仕事を一手に引き受けている。

「おや？今日は若旦那様と若奥様が治療してくれるのかい？」

診療所常連の老婆がアグルとキユルケの姿を見て嬉しそうに言う。「ええ、ここ最近皆さんを見ることのできなかつたので看させてください」

「具合は大丈夫だった？」

「ここしばらくはちよつと悪かつたけど、大丈夫さ」

アグルとキユルケは老婆の具合を丁寧に診察し、今の症状に効く食べ物や注意事項を伝えて老婆の診療は終わる。

「はいよ。これが診療費の代わりさ」

老婆が自分の畑で採れたかご一杯の野菜を置いていく。

この診療所では代金を払えない人々は代わりに野菜や穀物などを置いていくのだ。おかげでケント家では食費が大きく抑えられている。

「ありがたくいただきます」

「また頼むよ。二人を見るのは年寄りには良い薬さ」

アグルの礼に老婆は笑顔で帰っていった。

「若旦那様、若奥様、まだまだ患者はいっぱいいますよ」

一息つく間もなく使用人に呼ばれる二人。ようやく患者が全て片付いたころには日が傾きだしていた。

患者が全て片付いたことを確認したアグルは一人でとあるところへと向かった。クラークの墓である。

屋敷より少し離れたところにある墓地の一角にクラークの墓はある。

アグルは無言で花を添えた。

「……………」

周囲は風の音だけが響き、少し寂しげな雰囲気漂う。

「なんだか、未だにあなたの幸せを僕が奪ってしまったような気がします。僕がこの世界で経験していることは本来、あなたが経験するものだったのではないか？キュルケの夫になるのはあなただったのではないかと」

アグルの語りかけに答える声はない。

「あなたがするかもしれない役目は僕が引き受けます。今はゆつくり休んで来世で再び父さんと母さんの息子となって生まれてきてください。僕は父さんと母さんがこの世での役目を終えるまで二人の息子でいます」

アグルは自分がクラークの役目を継ぐことを誓い、その場を後にする。

このとき、アグルはジョナサンとマーサが生きている限り二人の息子となったのだった。

夕食はアグルとキュルケによる手作り料理となった。

使用人は目を輝かせながら料理を頼む。

「ああ……おいしい」

「こんな料理を毎食いただけなんて。若奥様にサドラーが羨ましいわ」

「決して上質な素材を使っている訳じゃないのにこの味付け。贅沢だわ〜」

使用人たちは最大級の讃辞を送って料理を味わっているがよく見ると奪い合いに近い状態である。

一つでも美味しい食事を胃に収めようと必死である。

「兄様、私が学院を卒業したらレストランを開いてみない？」

アグルの隣に座り、使用人たちの幸せな表情を見ていたキュルケがアグルに提案する。

「レストラン？」

「ええ。夫婦二人だけでお店を切り盛りして兄様が調理して私が料理を運ぶの。テーブルは二つか三つぐらいと少なめにしてそのぶん

お客には満足して貰うの」

キュルケの顔がうっとりとしている。きっとその情景を妄想しているのだろう。

だが、使用人がキュルケの皿に手を伸ばしているところをしっかりとひっぱたくあたり、料理を奪われるのは我慢ならないだろう。（たくましいなあ。僕の奥さんは）

アグルは自分の妻のたくましさと抜け目なさに感心してしまう。アグルに足りないところはちゃんとキュルケがカバーしていることがわかる。

深夜。

アグルとキュルケは外で共に入浴している。

キュルケが火を起こした後、アグルが土の魔法で風呂釜をつくって水の魔法で水を溜める。

温まった水は特殊な固定化の魔法で冷めないようにしてから浴槽に身を沈める。

「兄様、ご苦労様」

キュルケがアグルの肩をじっくりと揉んで疲れを取ってあげる。

「君もね」

アグルが水の魔法で水を操り、マッサージ器のようにキュルケの身体を揉んであげる。

疲れをすっかり取った二人は肩を寄せ合って星空を眺める。

「兄様、兄様は私で良かった？」

「ん？何が？」

「私、時々凄く不安になるの……。兄様ほどの存在が自分の使い魔をしてくれていいのか？それだけじゃなく、神様を自分の旦那様にするなんて凄く罰当たりなことをしてるんじゃないかって……」。

兄様が私だけを見てくれていることは十分すぎるほど知っているし、私も兄様しか見えない。でも、兄様と私では全く釣り合わない気がして……。とても不安になることがあるの」

キュルケが不安げにアグルへ身を寄せる。

いつも自信たっぷりのアグルを独占しているかのように見えるキュルケだがやはり不安はある。

なにせ相手は神そのものなのだから。人間と神とでは存在意義が数次元以上の隔たりがある。

そんな相手と只の人間である自分が釣り合うだろうか？

普段、キュルケからこんな言葉は出てこないが二人だけでなく、外での入浴という開放的な雰囲気の本心を出させたのだろう。

「キュルケ……そういうことを言わないの」

アグルはキュルケを抱き寄せ、向かい合う形で自分の腕に収める。

「キャ！？兄様？んん?!」

さらに有無を言わせずにキュルケにキスを行う。

「ん……んん、にい……様……ん、んむ、んちゅ、兄様……」

キュルケの不安な心が少しずつ薄れていく。

「……兄様……」

唇を離れたキュルケの瞳は涙で潤っており、不安な表情は消えていた。

「キュルケ、君は間違いなく僕の最高の奥さんだよ。君は僕がどういふ存在かを知っても僕を受け入れてくれたよね？そんな君が自分を僕にふさわしくないなんて言っちゃ駄目だよ。君はどんなところに行っても最高の奥さんになれるのに僕を選んでくれたんだよ？僕は決して君を離したりなんかしない。いや、頼むから僕の側についてよ……」

アグルからキュルケへの想いが自然と出てくる。

キュルケはすでに神すら虜にする最高級の女になっていたのだ。

「に、兄様……」

キュルケの両瞳から大粒の涙が自然と溢れてくる。

「兄様……」

目を瞑り、キスの続きを望むキュルケ。

アグルはそつと妻の唇に自分の唇を重ね、妻を力一杯に優しく抱



きしめる。

続いてアグルはキュルケのけしからんおっぱいを自分の腕の中  
もて遊びだし、同じくけしからん乳首をクリクリとつねる。

「んん！に、兄様……そこばかり愛されたらミ、ミルクが出ちゃう  
……」

キュルケの身体は他の女と比べて信じられないほど恵まれている。  
美巨乳としか言えないおっぱいに同じく美しい乳首、腰のくびれ  
とお尻は理想的なラインを誇り、大切なところの毛は無毛で一番感  
じるところをを愛されるとすぐに潮を吹いてしまう。

膣内は兄様のためだけに作られているだけでなく構造も名器中の  
名器をしており、子宮を突かれ続けると行きつぱなしになるだけ  
なく何度も潮を吹いてしまう。

そして乳首は愛され続けると母乳を吹き出してしまい、アグルに  
女体の味を提供する。

「兄様……もう、私……私……」

アグルはキュルケの求めに風呂を上がり、火と風の魔法で身体を  
乾かすとそのままベッドに向かう。

今夜の夫婦の時間が始まる。この日の二人の愛し合う様は非情に  
甘くて砂を吐きそくなほどだった。

翌日、早めの朝食を済ませたアグルとキュルケが学院に戻るとな  
にや然大騒ぎとなっていた。

「学院が騒がしいわね。いったい何があつたのかしら？」

まだサドラーに乗っているキュルケが上空から学院を見渡す。

アグルも同じく周囲を見渡し、とあるものを発見した。

「キュルケ、あれを」

キュルケがアグルのしている方向に視線を移動させると壁に大穴  
を作った宝物庫が目についた。

状況から察するにきつと宝物庫に泥棒が入ったのであろう。何が  
盗まれたのかまではわからないが。

「どうやら学院に泥棒が入ったようだね。何が盗まれたかはわからないけど」

アグルはサドラーを着地させるとキュルケらと別れ、教員の集まっている部屋へと向かった。

「くえー！（サドラー）、キュルケちゃん」

キュルケとサドラーはルフと合流し、先日に関が起きたのかを聞き出す。

「くえー！くえー！くわわわ！」

「ふうむ。どうやら予想通り学院に泥棒が入ったようですな。ルフたちは街から戻ってきたときにたまたまその現場に出くわしたそうです」

ルフが喋る言葉をサドラーが通訳する。

「くきやー！くわ、こつこつこ」

「泥棒はゴーレムを使って宝物庫の壁を破壊しようとしていたけど宝物庫の壁は固定化の魔法で硬かった。そこにルイズさんが魔法を放ってゴーレムを破壊しようとした」

「くえー！くきやー、けこ」

「だけど、ルイズさんの魔法は壁を爆破してしまった。爆破された壁にはヒビが入ってしまい、泥棒の操るゴーレムはヒビを重点的に攻撃して壁に大穴をあけた後に素早く一品か二品だけを盗んでいった」

「くあー、くけー！」

「ルフは泥棒を捕まえようとしてゴーレムに素早く飛び乗ったけどルフが穴に着いたころはすでに泥棒は逃げていた。以上が昨日起きたことのようにです。良いですか？ルフ」

「くわくわ」

サドラーの確認に頷くルフ。キュルケも昨日に起きたことは理解できた。

「なるほど……。原因の半分くらいはヴァリエールにもあるのね。」

だとすると犯人を捕まえる為の人員が組織されるはずよね。きっと兄様はまっさきに名乗り出るんだろっから……」

これから起きるであろう事態を想定してキュルケの目と口元が細くなる。

「使い魔の主人たる私も出番よね！」

## 第五話 事件（後書き）

実はアグルとキュルケの初体験話を考えているのですが需要はあるでしょうか？

## 第六話 解決

話は前日に戻る。

ルイズとサイトは学院から馬で数時間は離れている王都へとやってきた。

サイトが使う剣を買ったためである。

人混みでこった替えする中を武器屋に行く二人は運悪く追い剥ぎに出遭ったが身ぐるみはがされるなどということはなかった。

護衛のために一緒に来たルフが一蹴したのである。

へっぴり腰になりながらも強がるサイトを余所にルフは見事な連続蹴りを放ち、追い剥ぎ全てを黙らせた。

「あなたのほうがサイトよりも使い魔らしいわね」

ルイズが自分を守ってくれたルフの頭をなでながら呟く。

「くえくえ」

ルフが「どんなもんだい」とでも言っているかのように腰へ手を当てて胸を張った。

「武器屋はここよ」

大通りを離れた裏通りに武器屋があり、ルイズが先頭をきって入っていく。

店内では店主がのんびりとした雰囲気醸し出しながらパイプを吸っていた。

「こ、これは貴族様、いらっしやい」

店主はルイズのマントを見たとたんに少し慌てながら出迎えた。

「後ろの人間に使えそうな武器はある？」

ルイズが後ろを指さしながら店主に尋ねる。

「……………」

店主はサイトを値踏みするかのように見ると店の奥から細身で中くらいの長さの剣を持ち出してきてテーブルの上に置いた。

「こんなのはどうです？後ろの方の体格からするとこれぐらいがい  
いかと」

「ルフ。お願いできる？」

ルイズがルフに頼み、自分に代わって剣を見て貰う。

「くうわ」

ルフがテーブルに飛びのって剣の見定めを始めた。刀身をマジマ  
ジと見たり、少し叩いたりと評論家のような仕草で鑑定している。

「そっちの変わった使い魔さんは鑑定ができるのですかい？」

ペンギンを初めて見た店主はルフをルイズの使い魔と思ってルイ  
ズに問う。

とたんにルイズはしかめっ面となった。

「残念だけどそうじゃないのよ。ルフは私の先生のペットよ。どう  
？ルフ。よさそうな武器？」

「くうくう」

ルフが羽ペンと紙を使って文字を書き出す。

『なかなか良い感じの武器だよ。粗悪な金属も使ってなさそうだし  
手間もちゃんとかかっている武器みたいだね』

ルフが剣に下した評価はなかなか良いというものだった。それは  
適正な評価だった。

店主が驚きの表情を浮かべる。

「こいつは驚いた。そっちの動物さんは相当に頭が良いみたいです  
ねえ」

店主は正直に武器を持ってきたことに安堵した。

最初は見えてくれが豪華なものを持ってきてボツてやるうかと思っ  
ていたのだ。

「そう。サイト、あんたの武器はこれにするわよ」

ルイズがサイトに問うことなく武器を決める。

「ちよつと待ってくれよ。せめて俺が学院で戦った時に使ったのと  
同じような剣はないのかよ？」

サイトが抗議の声を出す。サイトとしてはサタンサーベルと同じ

くらいの剣が欲しかった。

強そうな剣を欲しがるのは男の本能みたいなものだろうか？

「あんだ、何、馬鹿なことを言っているの！？見ているだけで震えが起きるような恐ろしい剣がそこらへんにあるとも思っているの？あんなとんでもなく恐ろしい剣を基準にするんじゃないわよ！」

ルイズが小さな身震いを起こしながら一喝する。

サタンサーベルの放つ雰囲気は恐ろしさは思い出しただけで身を小さくしてしまうほどの物だった。

そんなとんでもない剣がそんなしょそこらにあるわけがない。

「店長、後ろの馬鹿は置いておいてこの剣の値段を教えてください？」

「へい。わかりました」

二人が剣の値段交渉を始める。

「け！」

サイトがふてくされ気味に壁に寄りかかった。

「はっはー！小僧、自分の望む武器は手に入らなかったようだな！」

サイトの右側から何やら声が聞こえたのでそちらを向くサイト。

しかし、誰もいない。

サタンサーベルよりも大きく、刀身が錆だらけの剣が一本、壁に立てかけられているだけだ。

「こっちなね。お前さんが見ている剣だよ」

剣が刀身を震えさせる。

「何だ？今度は喋る剣かよ？」

サイトは特に驚くことなく視線を剣へと移す。

ドラゴンや亜人、そして魔法。サイトがもっていた世界ではファンタジーの産物でしかないものをここ二週間で多く見てきたのだから喋る剣ぐらいではもう驚かない。

この世界では話すことができる剣はインテリジェンスソードと言われており、珍しい品物に入る。

「お前さんがどんぐらい立派な剣を欲しがっているのかはわからん

が普通の体格をしているな。そんな体格で剣を振るうなら、嬢ちゃん  
が交渉している剣ぐらいが適度さ。身の丈つてもんを考えな」  
とたんにサイトがカチンと来る。

自分は学院でゴーレムを相手に立ち回って見せたのだ。剣ごとき  
に意見をされたくはない。

「は！ 錆だらけの剣に講釈たれられてもなあ」

「剣だつて自分を最大限に活かしてくれる持ち主に持たれたいもん  
だぜ？ 他の剣は俺と違って喋れないがみんなそう思っている」

錆だらけの剣が剣としての意見を述べるが

「たかが剣がよく言うぜ」

サイトは若者特有の頑固さで受け付けない。

今のサイトを取り巻く状況からすれば当然のことかもしれない。

「ま、小僧ぐらいの年齢じゃ俺の意見を聞き入れるわきゃないと思  
うがおとなしく聞いといたほうがいい事つてもあるもんだぜ？」

剣に若造扱いされるサイトが方眉を吊り上げる。

実際にサイトは若造そのものだが面と向かつて言われると若造は  
すぐに癩癩を起こすものだ。

「その表情からすつと言われていることが気にいらねえんだろ？ 若  
者つてのは悪い意味で頑固だねえ」

「うっせえ！！」

サイトの堪忍袋の尾が切れそうになる。

そんなサイトを他所に剣に近づく動物がいた。ルフである。

「お？ おい？」

ルフはサイトを無視して剣を取ると二、三回軽く振った。

「なんだ？ おめえさんはずいぶん不思議だな？ 只の動物じゃねえ  
しなんだか昔の記憶に触れてくるようなものを持っていやがるな…

…つておい？ 俺を買っ気かよ？」

ルフが剣を引きずりながら店主の前に持っていき、『僕にはこれ  
を頂戴な』と紙に書いて店主に見せる。

「へ、へい。かまいやせんが料金は有りですか？」



店主はルフが料金を持っているのかを問う。

「くえ」

店主に問われたルフは腹の羽毛に手を突っ込んである程度の大きさの金塊を取り出すが

「ルフ。私を買ってあげるわ。護衛と鑑定のお礼よ」

ルイズが自分に払わせると言ってくる。

「くう？」

ルフは「いいの？」とでも言っているかのように首をかしげる。

「気にしなくて良いわよ。あなたや先生にはいつも世話になっているんだから」

「くえ」

ルフが「わかった」と言うかのように頷いた。

「ねえ、店主。あのボロ剣には名前があるの？」

「はあ。デルフリンガーって名前があります。けっこうやかましいんで黙らせたいときはこれを」

店主が店の奥から大きな鞘を持ち出してくる。

「ありがと。それで値段は？インテリジェンスソードは初めて見るけど錆ばっかりなんだから高いなんてことはないでしょ？」

「ええ。安くさせていただきます」

インテリジェンスソード、デルフリンガーは安い値段で手に入れることができた。

以上で武器屋での買い物は終わる。

武器を買った後は日用雑貨を買ったり、食事をしたりして時間を潰す。

一行が学院に戻ったところ、周囲はすでに夜となっていた。

「ルフ。今日はありがとうね」

「くわ、くわ」

ルイズの礼にルフが手をピラピラと振って返す。

「ルフ。今夜も私の部屋に泊まるんでしょ？」

「くっ」

ルフが頷く。今夜のルフの寢床は昨日と同じくルイズの部屋に決まったようである。

「そう。それじゃあ今夜も一緒に寝ましょう?」

ルイズは昨日と同じくルフを抱き枕にして寝るつもりのようなのだ。

「それじゃあな」

ルイズと同じ方向へ歩いていったサイトがルイズとは別の方向へと去っていく。

サイトが向きを変えた先には小さめのテントがあった。

普段、サイトはこのテントで寝たり起きたりしているのだ。

ルイズが住んでいるのは女子寮。女子寮は基本的に男子禁制なのだからサイトが使い魔とはいえ入ることはできない。

よってテントを張ってそこで寝起きしているというわけである。

「ふう。今日は動いたわね。きゃ?」

ルイズとルフが女子寮に入ろうとしていた矢先、突如地面を揺らすほどの轟音が響いた。

「な、何?!」

ルイズとルフが音のした方角を見ると、そこには学院宝物庫を殴る巨大なゴーレムがいた。

暗闇でよく見えないがゴーレムの肩にはゴーレムを操っているであろう人物がいる。

「な?!あれが殴っているのは宝物庫じゃないの!暗闇に紛れて来たのね!でえい!」

ゴーレムを操っている人物がお宝を目当てにしていることを理解したルイズがすぐさまゴーレムに向かってファイアーボールを放つ。普段、失敗しかない魔法だが今はそんなことを言っているときではない。

しかし、ファイアーボールは今回も失敗。壁に爆発を起こしてしまった。

爆発の煙がおさまった場所には人が二、三人ぐらい出入りできる

ような穴ができていた。

ゴーレムを操っていた人物はルイズが作ってしまった穴に素早く入っていく。

「きよわわわわ!!」

ルフが凄い速さでゴーレムに走り寄り、壁とゴーレムを蹴って三角飛びの要領で上へと飛んでいく。

ルフがゴーレムの肩に到着する直前、穴から人が出て行き、暗闇へと消えてしまった。

「くわあああ〜〜（逃がしたか。しかし、顔は見えたぞ）」

ルフが悔しげに呟いた。

穴の中にはさっきの人物が書いていったらしき文字が書かれていた。

『お宝を頂戴いたしました。』

「くけ、くわ（っということがあったわけさ）」

アグル宅でルフが先日起きたことをふりかえる。聞き手はサドラーとキュルケだ。

アグルはというと職員による緊急会議で不在である。

「ふむ。それで、宝物庫からは何が盗まれたのです?」

「けきよきよけこ（なんでも、呪いの杖という名前の宝らしいよ）」

「呪いの杖……ですか。聞いたことがありますね」

「私も聞いたことがあるわ。この学院に何世代も前から伝わる秘宝のことね」

サドラーもキュルケも盗まれたという宝に関して名前ぐらいは知っているようだ。

だが、盗まれた宝がわかったからと言って現状、キュルケらにできることは緊急会議の結果を待つことだけだ。

会議の結果によっては今回、学院として何もしないことも考えられる。

「結局、兄様が帰ってくるのを待つ以外、私たちには何もできない

のね」

「ふむ……それまではコーヒーでも飲んで待ちますか。ルフ、豆をひいてください。私はサイフォンと湯の準備をします」

「くけ（はいよ）」

「じゃあ私は菓子を準備するわね」

キユルケらが三者三様に動き出す。コーヒーと菓子の準備はすぐにできた。

周囲に淹れたたてコーヒーの匂いが漂っていく。

「こんにちは」

部屋の扉が開き、客がやって来る。タバサだ。

コーヒーの匂いにつられて来たのか鼻をさかんに鳴らせており、手には読みかけの本が握られている。

「あら、相変わらず鼻が利くのね」

キユルケが苦笑気味に友人を迎える。

「くわくけ〜（いらっしや〜い）」

ルフがタバサの分のコーヒーを差し出した。

「いただきます」

タバサはいつも自分が使っている席についてコーヒーをブラックのまま飲み出す。

「良い感じ」

「それはどうも」

タバサがサドラーに感想を述べながらコーヒーを飲んでいると

「きゅい〜きゅい〜」

外でシルフィードの声が響いた。

「飲みたいの？」

タバサが窓際により、シルフィードに問う。

シルフィードは頭を上下に振った。

「駄目。あげない」

「きゅ〜〜〜」

タバサの一言にシルフィードが滝の涙を流す。

「第一、これは苦い飲み物なんだからシルフィードには飲めない」  
「くけ、くけ？くええ？（ミルクと砂糖を混ぜればいいんじゃないの？）」

「シルフィードに飲ませるのはもったくない。第一、シルフィードじゃこの味をまだ楽しめない」

ルフのツツコミを冷静に返すタバサ。

「どうやら、ただ単にシルフィードにはコーヒーを飲ませたくないらしい。」

「美味しい物を一人占めしたいのは私以上ね。でも、兄様は絶対に渡さないけど」

キュルケが自分のコーヒーを飲んで呟く。「先生に兄様になってもらいたい」の宣言以来、キュルケにとってタバサは兄様をめぐるライバル認定を受けていた。

「マスターはもてますねえ。キュルケさんだけでなくタバサさんにも慕われるなんて」

サドラーが自分の分のコーヒーをつぎながら呟く。

「当然よ。私の兄様だもの」

アグルのもてっぷりはキュルケ公認だ。こればかりはキュルケがどんなにいい女になっても防ぐことができない。

「そう言いますがキュルケさんは自信たっぷりですね？」

「私だって兄様を独占できるだけの努力をしてるつもりよ？それでも兄様が二人ともを選ぶと言うならそれに従うわ」

「マスターはなんとも度量の広い奥様を手に入れましたねえ。もつとも、マスターが一人以外の女性を特別に愛するなど、考えられませんがね」

サドラーがキュルケの度量に感心しながらコーヒーを口に運ぶ。

キュルケはサドラーの返答に小さく笑うのだった。

場所は移って職員室。

職員室内は学院に入った泥棒と盗まれた呪いの杖に対する緊急会

議で踊っていた。

「先日の当直は何をしていた」とか「責任はどうするんだ」とか「王室に報告するのか」などと肝心の自分たちはどうすべきかが出てこない。

自分で責任ある発言をし、決定するのが怖いのであろう。

だが、この反応は当然のものだ。

誰が好きこのんでわざと地雷を踏むようなことをするだろうか？

「誰も解決策を提示しないなら僕に全て任せてもらえませんか？」

誰も対応策を言えない中、アグルが名乗り出る。

アグルは永い旅で様々なやっかい事に巻き込まれてきた。それも神々まで含めたやっかい事に。

人間のやっかい事など神々のやっかい事に比べてたいしたこともない。

「どうするつもりです？」

教師の一人がアグルに問う。アグルの返事は

「盗まれた杖を取り返します」

というごく簡単なものであった。

「どうせ今のままじゃあ何も解決しません。ならば僕に任せてもらっても良いでしょう？ 学院長」

「任せよう。ケント君。無事に取り戻すことができたなら賞金もつけよう」

アグルの名乗りをオスマンは拒否しなかった。現状のままではアグルの言うとおり何も解決しない。

それに学院内で最強のメイジが自ら行くというのだ。彼が解決できなかつたら外部に対するそれなりの理由も立つ。

「コルベール先生。手伝いをお願いしてもいいですか？ 一人よりも二人の方が成功率が上がります」

アグルがコルベールに助けを申し出る。

コルベールは頷くことでアグルに返した。

「それでは、今回のことはケント君に任せようかの」

オスマンの一言で会議が終わろうとしていた。

「お待ちを！盗人の情報を仕入れることができました！」

しかし、突如一人の女性が職員室内へと入ってくる。その女性はオスマンの秘書をしている女性だった。

彼女の名はロングヒル。ここ最近、オスマンが雇った没落貴族の娘だ。

「どういうことかの？ミス・ロングヒル」

「そのままです。今回の盗人のものと思われる情報を手に入れることができました」

「ほう……。ちょうどケント君とコルベール君が対盗人の担当となつたところじゃ……。よし、三人で事に当たってくれ」

アグルが自宅に戻つたのはそれから少したつてからであった。

「どうぞ。コルベール先生、ミス・ロングヒル」

「は、失礼します」

アグルがコルベールとロングヒルを自宅へ通すとそのまま食堂へとやってきた。

「サドラーとルフイがい席を外してくれるかい？」

「兄様。私も？」

「君もだ」

キュルケにも退出を促すアグル。キュルケとタバサは大人しく従つて出て行つた。

「さてと。コルベール先生にミス・ロングヒル。作戦を練りますか」

「はい」

「わかりました……が、彼らは良いのですか？」

ロングヒルがルフとサドラーをチラリと見る。

「彼らは僕が最も信頼し、頼りにする存在です。彼らがいて僕は初めて一人前になれるんです」

アグルの言い分にロングヒルはそれ以上言うのを止めた。

室内の面々が相談を始める。議題は盗まれた品を取り返すことだ。

「……何を話しているのかしら？タバサ、聞こえる？」

「駄目。きつとサイレント（沈黙）をかけている」

キュルケとタバサがドアに聞き耳を立てるがまったく聞こえない。おそらく、声が外に漏れないように魔法を使っているのだろう。

「どうにかして部屋の中の声を聞き出せないかしらねえ……」

アグルたちが何を話し合っているかぐらいは安易に想像できる。きつと盗まれた品物を取り返す算段だろう。

だが、アグルはキュルケに心配させないためなのか部屋にサイレントの魔法をかけている。

サイレントは会話を漏れさせなくする魔法だ。これでは室内のことが何もわからない。

キュルケが頭を抱え出す。

「しょうがないわねえ……おとなしく待っていきましょうか」

二人はキュルケの勉強部屋へと向い、アグルたちが出てくるまで待つことにした。

結局この日、授業は午後まで行われることがなかった。

翌日。

アグル、コルベール、ロングヒル、ルフ、サドラーが森の中を馬車で移動していた。

サドラーがペガサス形態となつて馬車を引き、アグルは手綱を握る。他は馬車内だ。

周囲には三人と一頭、一匹しかいない……はずなのだがアグルたちをはるか上空から追いかけている存在がいた。

シルフィードに乗るキュルケ、タバサ、ルイズ、サイトである。

アグルたちはキュルケたちを残して任務のために出立したのだがキュルケたちはそれに納得せず、後ろをつけてきたというわけである。



「兄様も酷いわね。妻であり主人でもある私を置いていくなんて。君を危険な目にあわせたくない」なんて格好つけ過ぎよ」

キュルケは少々お冠である。

アグルがキュルケに対して今回の仕事内容に関してほとんど告げずに出て行ってしまったのが原因だ。

キュルケは「主人である自分も行く」と言い張ったのだが、アグルの「君を危険な目にあわせたくないのさ。主人を危険な目にあわせないのも使い魔の役目だよ？」という言葉に諭されてしまった。

（（あれだけ目を潤ませて送り出しておいて何を言っているんだか……））

キュルケ以外の3人が同時に同じ事を思う。

アグルが出立するときのキュルケの表情は正に夫の無事を祈る妻の表情だった。

他の面々はサドラーとルフ以外、その空間に当てられてしまったそつばを向いていたものだ。

それでも追いかけてきてしまうあたり、キュルケにとっては納得できないものがあつたのだろう。

特にルイズは宝物庫にヒビを入れさせてしまったのは自分なのだから責任を取ると鼻が荒かった。

アグルに「生徒の尻ぬぐいをするのは教師の役目だよ」と言われてしまっているが。

「マスター」

「わかっているよ。彼女らにも困ったものだね。後でしかっておかなきゃ」

馬車を引くサドラーとアグルは後ろの気配にとくに気づいていた。

しかし、少し苦い顔となりながらも後ろを振り向くことはなかった。

（キュルケにはずっと箱入りでいるなんて言うつもりはないけど…

…今回のような任務には来ないで欲しいと思うのは僕のがままだろうか？)

アグルは答えを出すことが難しい問題に頭をしばし占領させながらもサドラーを操って森の中を走る。

その頃の馬車内。

馬車内の雰囲気はいまいち気まずいものであった。昨日からルフがロングヒルをジッと見ているのである。

おまけにルフはなにやらどこでかい剣を背負っている。

武器を背負っているペンギンにジト目で見られるロングヒルはあまり良い気分ではなかった。

「あ、あの？昨日からなんでしょう？私の顔になにかあるのですか？」

ロングヒルがルフに何事かと問いかける。

「くう〜う」

ルフは「べっつに〜」とでも言っているかのような鳴き声を発すると窓の外に目をむけた。

頬杖をついて斜め上を向くあたり実に芸が細かい。

「ルフ殿。その剣を見せて貰うことはできませんか？」

気まずい雰囲気にもルベールは話題を作ることにした。ターゲットはルフが背負っている剣だ。

ルフに背負われている剣。それは先日買ったデルフリンガーだ。

ルフが歩いたり走ったりしても引きずらないように鞘には車輪がつけられている。

「くう？（見てみる？）」

ルフが剣を抜き、コルベールに見せる。出てきた剣は錆だらけだった。

「なんと？錆だらけですか？」

「あんだと?!失礼な！」

「な?!インテリジェンスソードですか?!これをどこで手に入れ

たのです?」

剣が台詞を発したことに驚きの声を発するコルベール。

『ルイズちゃんに街で買ってもらった』

「ほう?ですがインテリジェンスソードは高かったのではないですか?」

『もちろん値切ったよ。錆だらけだし口は悪いし』

ルフが筆談でコルベールに返し、二人の会話が進む。

やがて、森の中深くに着いたころ、アグルとコルベールが馬車を降りて狭い道を歩いていく。

ロングヒルの話だと、この先にある小屋に賊がいるという。

サドラー、ルフ、ロングヒルは居残りだ。

「あ、あの……。あなたたちはケント先生と行かなくて良いのですか?」

ロングヒルが「なんで一緒に行かないんだ」というような口調でサドラーとルフに尋ねた。しかし、

「いい加減にして貰いましょうか。泥棒さん」

人間形態となり、ルフと同じくジト目をしているサドラーの口から意外すぎる宣告がなされる。

「あ、あの、何を言っているのでしょうか?」

「ルフがすっかりとあなたの顔を見ていたんですよ。泥棒に入ったのが暗いときだからといってルフの目を甘く見ないでほしいですね」  
ロングヒルの目が驚愕に見開かれる。

学院に入った泥棒、それはロングヒルであったのだ。

「ふん!最初から気づいていたって言うのかい?」

続いて口調が変わったロングヒルが杖を抜こうとした。

「ふう!」

しかし、サドラーが瞬間的に動いて杖を叩き折り、

「くうわ!!!(そこまでにしな!!!)」

ルフがデルフリンガーを抜いてロングヒルのど元に突きつける。

杖がなくなつたロングヒルに抵抗手段はなくなつた。

「なんで私を今まで見逃していたんだい？」

ロングヒルが諦め気味にサドラーとルフに尋ねる。

「あなたの目が放つ雰囲気からあなたの後ろには何人も人間がいるのを見えました。それを見たマスターが「見逃してあげな」と言つたのです」

ロングヒルには人に言えない事情があつた。その後ろにはサドラーの言うとおり何人も人間がいた。

「は！最初から最後まであんたたちの掌だつたつていつのかい」

「いかにも」

「くかゝゝ（ま、そういうこと）」

ルフがデルフリンガーを鞘におさめる。

「さて、盗んだ物は返してくれますね？そしてあなたにはしてもらふことがあります」

サドラーの言うことにロングヒルは抵抗できなかつた。

そのころのアグルとコルベールはロングヒルの言う空き屋に来ていた。

空き室内からはあつさりと目的の物が回収された。

「ふむ？たしかにこれは呪いの杖ですね」

コルベールが杖の確認を行う。コルベールは何度か宝物庫に入つたとき、呪いの杖を見たことがあつたので間違いはない。

「いったい、これのどこが呪いの杖なのでしょう？」

呪いの杖というのは見たところ、先端に球が埋め込まれ、装飾が綺麗で多少高価そうな杖にしか見えない。

「まあ、そうですね。これの使い方を知るのは学院では学院長と僕ぐらいですよ」

対するアグルは道具を見ながら懐かしそうに呟く。

「なんと？ケント先生はこれの使い方を知っていると云うのですか？」

「ええ。それよりも賊が来たようです」

アゲルの台詞の直後、地鳴りが響く。外を見ると巨大な岩のゴーレムが小屋に歩きよろうとしていた。

「あ、あれは?!」

コルベールが驚きの声をあげる。

「きつと、学院に入った賊というのはあのゴーレムを操っている者でしょうね。それよりも早くここを出しましょう!」

アゲルがコルベールをせかして二人は小屋を大急ぎで出る。

二人が小屋を出た直後、ゴーレムが拳を振るって小屋を粉碎させた。

危うく難を逃れた二人がゴーレムを見ると、ゴーレムの肩には全身を衣で覆ったいかにも怪しげな人物がいた。きつとゴーレムを操っている者であり、呪いの杖を盗んだ者だろう。

「ゴーレムを操っている人よ!!我々はあなたが泥棒に入った学院の教師だ!宝物庫から盗んだ物は我々が取り返した!!今、大人しく捕まるなら身の安全だけは保障する!!」

コルベールは投降を呼びかけるもゴーレムの動きは止まらない。

「くそ!」

ゴーレムより大きく距離を取ったコルベールが巨大な火球を放った。

火球はゴーレムに炸裂したがたいした痛手になっていないようであった。

勢いは止まらず、執拗にアゲルとコルベールを襲う。

「しょうがない!!コルベール先生!ここは僕に任せてください!!」

アゲルが呪いの杖を取り出してゴーレムの前に立ちはだかると、ある言葉を唱える。

「吸え!!我が魔力!!」

呪いの杖から植物のツルのような物が湧き出し、アゲルの腕に絡まった。

直後、杖の先端に埋め込まれている球が発光しだす。

「吸われた魔力よ！！剣となれ！！」

球から放たれる光が大きな刃を形作る。杖だった物は巨大な光の刃を持つ槍へと変わった。

「せい！！」

アグルが杖を振るうと刃がゴムのように伸びていき、ゴーレムの片腕を切り落とす。

ゴーレムはひるまず、残った片腕でアグルをつぶそうと拳をくりだす。しかし、

「広がれ！！魔力よ！！」

杖はアグルの言葉がわかるかのように剣だった部分を扇形に形を変える。

扇形に広がった光がゴーレムの拳を見事に受け止めた。

「むうん！！」

アグルが杖を大きく振るう。光はゴーレムの拳を掴んでいるかのように離さず、ゴーレムを投げ飛ばした。

「今だ！！」

アグルは普段所持している杖を取り出し、ゴーレムが飛ばされたほうの地面に向かって錬金の魔法を唱えた。

土の色が黒色となり、感触もサラサラしたものに変わる。

ゴーレムは投げ飛ばされたものの、賊を肩に乗せたまま立ち上がろうとしている。

「動くな！！周囲の土を全て火薬に変えた！！今、そこに着火させると君は死ぬぞ！！」

アグルが杖に火をともしながら賊に警告する。

ゴーレムの動きが一瞬にして止まる。

見るとゴーレムがいるあたりの地面は黒色火薬で埋め尽くされていた。いかに岩でできたゴーレムといえど、地面全てが爆発するほどの火薬には原型を留められない。

「投降するなら地面を元に戻す！だが、それでもゴーレムを操るな

「今すぐ着火させる！！魔法で飛んで逃げようとしても同じだ！！  
投降するなら顔を見せる！！」

「頼む！！我々の言うことに従ってくれ！！」

「コルベールが説得を行うも賊は顔を見せずにゴーレムを立たせようとしている。」

「なぜ我々に従ってくれない？！今のままでは確実に死ぬのだぞ？！」

「賊はアグルとコルベールの言うことを聞くつもりがないようだ。」

「……さよなら」

「アグルから選別の言葉と火の魔法が放たれる。」

「コルベール先生！！離れてふせて！！」

「アグルとコルベールが後ろに逃げ、伏せた直後にゴーレムがいたあたりの地面が大爆発を起こす。」

「爆発の後にあったのは雨が降った後、中くらいの堤が出来そうなほどの大穴であった。」

「あの爆発では賊は生きていないだろう。」

「なぜ従ってくれなかったんだ……。死ぬのはわかっていただろうに」

「従ってくれなかった理由はわかりません。コルベール先生、僕は片付けを行ってから戻りますので先に戻っててください」

「アグルに言われたコルベールは大きく肩を落としながら戻っていた。」

「さて、二人とも、出てきて貰おうか。そして……」

「アグルが後ろの茂みがある方向に話しかけ、空に向かって『来い来い』と言っているかのように手を振る。」

「茂みからサドラーとロングヒルが現れ、空からは少し顔を青くしているキュルケたちを乗せたシルフィードが降りてきた。」

「兄様！！」

「キュルケがアグルに抱きつく。」

「なぜ、ついてきたんだい？僕が気づいていたことぐらい知っていただろ？」

「それでも……それでも心配だったの」

アグルの少し責めるような口調にキュルケが俯いてしまった。

「それにミス・ヴァリエールにミス・タバサ。なぜ君たちまで来た？サイト君、男の君がいながらなぜ止めなかった！」

アグルの責めはキュルケだけじゃない。ルイズ、タバサ、サイトにも向けられる。

「こ、今回の責任の半分は私にあります！だからついてきました」  
ルイズが責任の所在によって自分を正当化させようとする。

「教師というのは生徒の尻ぬぐいをするためにいるんだと言わなかったかい？それにまだ自分の責任を取れる力のない君が一人前に責任なんて言うな！君には今回、僕がやったように人を殺せる覚悟があるのか?!」

ルイズもキュルケと同じく俯いてしまい、サイトにいたっては何も言えなかった。

サイトはルイズの剣幕に抵抗することすらしなかったのだ。

一人、タバサだけは俯かずにアグルの話を聞いている。自分たちの行為がすべきものではないことがわかっていているのだらう。

「わかつたらさっさと戻るんだ。今回は目を瞑るし、学院長にばれども僕がなんとかする！」

アグルに言われた四人は大人しくシルフィードに乗り、去っていった。

「さて……今度はこっちか」

アグルがサドラーとロングヒルに顔を向ける。

「後ろの亜人に言われたとおりに動いてやったよ。これで見逃してくれるかい？」

ロングヒルがアグルに尋ねる。

その態度はブスツとしており、つまらなそうだ。



「ええ。サドラーの言うことに従ってくれて感謝します」

アグルとコルベールを襲ったゴーレムはサドラーに指示されたロングヒルが造り出したものであった。肩に乗っていた人らしきものも。つまり、アグルは先の爆発で誰も殺してはいなかったのだ。

「今回の賊はこれで死んだということですよ。コルベール先生という証人もいますので疑われることはないでしょう。あなたはもう、泥棒なんてお止めなさい」

サドラーがロングヒルに盗人家業はもう止めるように言うが

「そうはいかないね。私にはあんたらが気づいていたように盗みを止められない理由があるんでね。正直に言うと目の前にある呪いの杖の使い方がわかったんで今すぐにでも売り払いたいんだ」

ロングヒルが悪びれもせず、アグルの持つ呪いの杖を見つめる。

「……持ちながら言ってみるんだね「吸え、我が魔力」と」

アグルがロングヒルに呪いの杖を投げ渡した。

「は！！馬鹿な男だね！この杖の強力さはさつき見てたからわかるんだよ！！」

ロングヒルの目が怪しく笑う。呪いの杖を振るえば二人を倒して逃げ切れると思っっているのだろう。

「吸え！我が魔力」

呪いの杖からツルが伸びてきてロングヒルの腕にからみつく。ツルはロングヒルの魔力を吸い出した。

「あばよ？！ぐああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

杖を振るおうとしたロングヒルが突如悲鳴を挙げだした。

「言い忘れたけど、そのツルは腕に絡まっているだけで魔力を無尽蔵に吸うんだ。早く手放さないと魔力どころか生命力も吸われてミイラのようにひからびて死ぬよ？」

「ぎゃああああああああ！！」

アグルの言うことはロングヒルに聞こえない。数秒の後、ロングヒルはやせ細って意識を失った。

「全く……わかつたる？なんで呪いの杖なんて言われるか。この杖を持っていて意識を保てるのはこの世界で僕とサドラーとルフしかいないんだよ」

アグルが呆れ気味な表情となつて杖を取り返す。

呪いの杖。正式名、光魔の杖（しつまつえ）はかつてアグルがこの世界で戦つたときに作つたものだ。

特徴として魔力や生命力を絶大な攻撃力や防御力を持つ刃に変える。

だが、持っているだけで魔力や生命力を無尽蔵に吸われてしまうため、人間には仕えない。

アグルはこの杖を戦いが終わったときにどこかへ紛失してしまつた。

巡りめぐつて封印の意味で学院倉庫に落ち着いたのだろう。

「さ、戻ろうか。後はロングヒルさんをどうするかだね。これで懲りてくれるといいんだけど。サドラー。君らがロングヒルさんを脅したときの場面はキュルケらに見られているかい？」

「それは大丈夫です。キュルケさんらには我々の行為は見られていません。キュルケさんらは常にマスターとコルベール先生だけを見つけていました」

アグルとサドラーが話しながら道に戻っていく。

ロングヒルはサドラーに担がれる格好となつており、数日は目覚めないだろう。

無事、宝を取り戻したアグルには多額の賞金が配当された。

アグルは賞金を使って遊ぶようなことはせず、全額をケント家に送った。

ジョナサン、マーサはこの賞金を使わず、アグルとキュルケの結婚式のために取っておくことにしたそうだ。

「あなた。二人の結婚式はどこであげればいいでしょうね？」

「今からそんなことを言っているのかい？二人はもう夫婦そのもの

なんだから二人から式の相談を受けてからでも遅くないんじゃないかい？」

「何を言っているんですか！良い式場というのはだいたい予約で一杯なんですよ？今の内からめぼしいところを探しておいて遅いなんてことはありませんよ」

マーサの台詞にジョナサンはまたも苦笑するのだった。

## 第六話 解決（後書き）

とある資格試験に合格いたしました。

今の時代、資格をとって損はあまりないので次のステップへ頑張ってくださいと思います。

追加：指摘のあった場所を修正しました。

## 第七話 披露

「さて、品評会か。何をすればいいものだけ？」

アグルが呪いの杖を取り戻して数日後、アグルは自室で一人、頭を抱えていた。

今から一週間後にトリスティン王国の王女が学院に来る。

そのとき、使い魔を召還した生徒たちによる使い魔の品評会が王女の前で行われる。

アグルは学院の教師であるがキュルケの使い魔でもある。

よって何か芸と言えるものをしなければならぬのだが何をすれば良いのかがなかなか思いつかなかつた。

サドラーやルフに何か良い案はないものかはずでに訊いているのだが

「思いついたもので良いのでは？」

とか

「くけくけ、くきやくきゃ（どうせ何やっただって神様級なんだから何でもいいんじゃないの？）」

というふうにもともに相談に乗って貰えてない。

キュルケにも相談しているがキュルケには学業があるため、本格的な相談はできない。

「は〜〜。キュルケに恥をかかせるわけにはいかないしな〜。

隣で作業している友達は何んにもヒントをくれないし」

アグルがジト目で部屋の片隅を見る。そこではルフがデルフリンガーを器用に磨いていた。

デルフリンガーは買ったとき、錆だらけの刀身であったが今はすっかり綺麗に磨き上がっている。

「あ〜〜そこそこ。お前さんは剣の手入れってものを知っているね〜」。お前さんに買われたときはどうなるかと思っていたが剣を大

事にする神経の持ち主で良かったよ」

デルフリンガーが満足げに話す。刀身が切れ味鋭そうに光を反射していた。

「マスター。ルイズさんとサイト少年が来ています」

サドラーが部屋に入ってくる。サドラーの後ろにはルイズと剣を持ったサイトがいた。

「失礼します」

「し、失礼します」

アグルを前にしたサイトは少し緊張気味だ。きつと以前の盗賊騒ぎのとき怒られたことが響いているのだろう。

「どうかしたのかい？」

「相談したいことがあって……」

「そうかい。二人ともとりあえず座ったら？」

アグルが着席を勧める。

ルイズは腰を下ろすと話し始めた。内容は品評会でサイトに何をさせれば良いのか？ということだった。

「そうか。君らも同じ事で悩んでいたのか」

アグルは同じ事を考えていた仲間がいたことに若干ホツとした様子  
子の表情を浮かべる。

「ま、サイト君の場合はそのルーンとミス・ヴァリエールに買って貰った剣をダシにすればいいと思うけどね」

「サイトのルーンと剣？あれがなんの役に立って言うんですか？」

「ふ〜む。言うよりも見た方が早いかな。よし、少し外に出よう。  
ルフ。君も一緒に来て」

アグルの呼びかけにより三人と一匹が外に出て行った。

外に出たアグルはルフにデルフリンガーを持たせ、自分は石ころを何個か拾う。

「さてと、ルフ。いいかい？」

「くえくえ」

石をお手玉しながら尋ねるアグルにルフが「いつでも来い」と言っているかのように鳴いた。

「ふう!!」

アグルが突然、石を投げる。

「きよわ!」

ルフが石をデルフリンガーで叩き落とす。

アグルは次々と石を投げ、ルフが叩き落とし続ける。

「きよわわわわわ! きよわああああ!!」

石を叩き落とし続けるルフが最後に一際大きく鳴きながら剣を振り下ろす。

ルフに向かって投げられた石は全てが叩き落とされた。

地面にはいくつもの穴があいている。

「……………」

ルイズとサイトはルフの芸に目を点にしてしまった。

「サイト君、次は君の番だよ。僕が再度石を投げるから君の剣でルフと同じ事をやってごらん」

「んな?! む、無理!」

アグルの呼びかけにサイトが手と頭を大げさなほど左右に振って拒絶する。

考えれば当然の反応だろう。

「そのルーンと剣があればできるよ。いいからやってごらん。君は前にゴーレムを叩ききったことがあったじゃないか。大した怪我をしないように今回は軽めの石を投げるから」

「それとこれは話が別だよ! 俺は無理だって言ってるんだよ! そんなの怖くてできるかよ! ぐは?!」

サイトは力一杯に拒否していたが突如、腹に異物感を感じてうずくまってしまった。

なんのことはない。ルイズがボディーブローをサイトの腹に決めたのである。腰の入った見事なボディーブローだった。

「あんだ！いいかげん、目上の人への言葉遣いってものを覚えなさい！！先生のような人にいつまでもため口なんて何様のつもり！！？あんたは誰にでもため口を叩けるぐらい偉いっていうの？！」  
年上への言葉遣いを直そうとしないサイトにルイズが半切れ気味となる。

サイトの口調はいつのまにか元に戻っていたようだ。

ルイズの言うことはもつともなことだったからサイトには反論することもできなかった。

「ミス・ヴァリエール。まあ落ち着いて。言葉遣いなんてものは意識している内に直っていくものなんだから。それよりもサイト君。ここは一つ僕を信じて貰えないものかな？君は以前、ゴーレムを剣で叩き斬ったよね？君の持つルーンはそういうことができるようになるルーンだからルフみたいなきもできるはずなんだけどなあ」

「…わか……りました」

サイトはぶすくねながら「わかったよ」と返そうとしたのだが再びルイズからの拳が飛んでくるのを本能的に察知して目一杯丁寧に返す。

「さて、それじゃあ君の剣を抜いて貰えるかい？」

サイトが剣を構える。考えればルイズに買って貰った剣をまともに握るのは初めてだ。

「あ……」

サイトの左手がわずかに光っている。見てみるとルーンが発光していた。

自らの左手が光っていることを確認したサイトは次の瞬間、不思議な感覚に襲われた。

目が、耳が、感覚が、そして頭が妙にはつきりしている。

（あ、あれ？どうしたんだ？）

サイトは自らの身体の変化にとまどっていたが

「ぶー！」

アグルがサイトに確認を取ることなく石を投げる。



「わ?!」

サイトは驚きに目を開きながらもこっちに来るなど言わんばかりに剣を振り下ろす。

石が刀身ではられ、地面に落ちる。

サイトは突然の危機が回避できたことに安堵し、顔をあげたが気づくと目の前にはいくつも石が飛んできていた。

「わああああああ?!」

無我夢中で剣を振るサイト。結果、石は全てが叩き落とされた。

「な、何をするんだよ?!」

息つく間もなくアグルに抗議するサイト。対するアグルは無言で地面を指さす。

アグルの指が指している先を見たサイトは目を疑った。

地面にはさつき、ルフが作った数以上の穴があるではないか。

「これ、俺がやったのか?」

サイトは自分が行った事が信じられずにただ呆然としていた。

「どう?ミス・ヴァリエール。これをすれば品評会に出しても恥ずかしくないんじゃない?」

「はい!!先生。ありがとうございます!」

ルイズの目が輝く。どうやらこれで恥をかかずにすみそつだ。

「いったい何が……」

サイトは未だに呆然としている。只の人間でしかない自分が突然に剣の達人でもできないことができてしまった。これが自分の持つルーンの力だというのか?

だとしたらギーシュのゴーレムと闘ったときは何もかもが無我夢中で何にも気づくことができなかつたことが今回、ようやく感じ始められたということなのか?

「くわくわ」

ルフが未だに戻ってこないサイトをつつつく。

サイトはようやく戻ってくる事ができた。

「サイト君、君のルーンの力がわかったかい?そのルーンは武器を

持つことで力を発揮するのさ。今、君ができたことを品評会で行えば良い。飛んでくる石を叩き落とすなんて剣の達人でも普通はできないことだからね」

アグルがルーンの力を簡単に説明する。その力はある伝説の話に出てくるものと同じであったがルイズとサイトが気づくことはなかった。

ともかく、サイトが品評会で行うことは決まった。

「先生。ありがとうございます」

ルイズは何度もアグルに頭を下げて去っていった。

「さてと。次は自分のすることを考える番か剣を使っちゃうネタはもうあげちゃったしなあ」

自宅へと戻ったアグルが再び頭を抱える。

「どうせなら魔法を使って何かできないものかな……そうか……」  
アグルの頭に何かが閃く。

アグルの閃きを見たキュルケの反応は

「もう。兄様大好き!!」

この一言だったそうだ。

トリスティン王国訪問当日。

王妃、アンリエッタを乗せたユニコーンの馬車が到着した学院は蜂の巣をつついたような大騒ぎとなっていた。

生徒たちは名目上、アンリエッタのお出迎え役ということだったが静かにしているということはやはりない。スーパースターを前にしたファンのように大騒ぎとなっている。

アンリエッタが馬車から優雅に姿を現すと歓声はますます大きなものとなった。

「あれがアンリエッタ姫か……。兄様、私と彼女、どっちが美人？」  
「ふむ。作られた美人という意味ではアンリエッタ姫。でも、奥さ

んにすべき美人というふうを考えれば君というところかな？」

「じゃあ、選ぶならどっち？」

「迷わず君」

アグルとキュルケは遠くからアンリエッタを見ながら話している。「それにしても……王室のユニコーンってたいしたことがないのね。サドラーと比べたらかすんでしまうぐらいの存在感しか感じないわ」馬車を引くユニコーンは確かに立派なものであった。だが、それだけだ。

サドラーがペガサス形態となったときににじみ出ている圧倒的な存在感と品格がない。

「そんなことを言っちゃだめだよ。サドラーと彼らは元が違っただから。それに、サドラーを馬の基準にしてしまったらハルケギニアの馬全てが並以下になってしまうよ？」

アグルの言うことはしごくもつともなことだろう。二人はアンリエッタの姿が見えなくなるまで話していた。

「くえ、くえ（次、次）」

「ちよつと待って。ここの意味がよくわからない」

アグルの後ろではルフとタバサが木陰にて一緒に本を読んでおり、

「zzzzzz……」

「きゅ〜きゅびゅ〜」

シルフィードを背もたれにしたサドラーがシルフィードと昼寝をしている。

「うおい！俺っちの相手は誰もいないのかよ？」

デルフリンガーは一人寂しげに叫ぶのであった。

午後、品評会が始まり、学院は歓声や笑い声に包まれ出す。

学院の敷地内の広場に特設ステージが建てられ、最もステージが見やすい場所には日よけ用のテントが張られている貴賓席がもつければ、一年生、三年生たちは学年の上下を問わずに座りあっている。

二年生たちは次々と使い魔を使つての芸事の特設ステージで行う。タバサはシルフィードで見事な空中浮遊を行わせ、ルイズは先日、アグルに教えて貰ったことをサイトに行わせて何とか好評を得た。

次はキュルケとアグルの順番だ。

「では次、ミス・ツエルプストー」

コルベールに順番を告げられたキュルケが悠然とステージ中央に歩いていく。しかし、隣にアグルの姿はない。

「キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。私の最高の使い魔が行う芸を披露する機会を与えてくれてありがとうございます。私の使い魔は「最強」の二つ名を持つ魔法使い。「最強」による「最高」の芸をご覧ください」

キュルケが自分の言うことを終えるとそのままステージを去っていく。

会場は「何をするんだ？」とか「何にも無しで終わりか？」というような言葉が響いていたが数秒後、学院は突然の暗雲に包まれた。昼間だというのに夜のような暗さに囲まれる。

会場が再び何事かと騒ぎになるが、雲の一部だけが切れてステージの一部分だけを照らすように日光が差し込んでくる。会場はまたたく間に静まりかえった。

周囲が静寂に包まれて数秒後、照らされている部分で大人一人ぐらいの大きさの爆発が起きる。

爆発がおさまった後には金色の衣装に身を包み、サングラスをかけたアグルが姿を現す。

アグルは足を肩幅ぐらいまで開き、両腕を少し曲げ気味な形で立っており、サングラスをかけた顔は横を向いたまま微動だにしない。

だが、全身から発せられる圧倒的な気配はアンリエッタを初めとした王族すらかすんで見えてしまう。

後ろには火花の滝が流れ出してステージと会場を彩る。

会場は初めて見る演出によってたちまちのうちに歓声に包まれた。

アグルはゆつくりとサングラスを外し、

「AH O!!」

奇声を発しながらステージの二カ所を指さす。

指さされた場所では爆発が起き、爆発がおさまった後には楽器をかまえたルフとサドラーが現れる。

新たに現れたルフとサドラーが楽器で聴いたことのない音を奏で出し、アグルが音に合わせて歌い、踊り出した。

アグルの踊りは芸人の行うようなそれではなく、切れも速さも段違いで芸事を多く見ている来賓でも見たことがないものしかかった。

歩いているように見えるのに後ろに歩いていくバックスライド（ムーンウォーク）、正面に歩くように横へ移動するサイドウォーク、身体を45度傾けたまま立つゼログラビティなどが歌と同時に疲労されていく。

水の魔法によるスモーク（煙）がアグルの動きによって揺れ、土の魔法によって瞬間的に錬金された宝石が服を彩っていき、風の魔法が拡声器のようにアグルの声を学院中に響かせる。

さらに決めポーズの度に風がなびいたり、火柱が立ったりしてアグルの姿をより印象づけるものとなっていく。

ルフとサドラーが奏でる音と完全調和した踊りと歌声は学院中の視線を一人占めしだし、会場がさらなる歓声に包まれる。

「PAO!」

アグルが再び奇声を発しながらその場で回転をした瞬間、ステージの四カ所で水柱が立つ。

水柱がおさまった後には踊っているアグルとは別の衣装を着たアグルそっくりの男が四人いた。

風の魔法で分身を作り出す「遍在」である。

分身はアグルの後ろに移動するとバックダンサーのようにダンスを披露する。その息は全てがピッタリで一瞬たりともずれがない。

本体のアグルは分身とは全く別に動き、同時に歌を盛り上げる。

アグルによる歌と踊りはおよそ10分間続き、ルフとサドラーが  
一際大きく音を奏でた瞬間、アグルと分身が最後のポーズを決める  
ことで幕を閉じた。

アグルの魔法を使った芸が終わった後、雲は晴れて学院はいつも  
の光景に戻る。アグルの姿はいつの間にか消えていた。

「ふ〜。やれやれ。終わったね」

「兄様。ご苦労様」

ステージの裏舞台でキュルケがアグルの顔を濡れタオルでふいて  
あげる。

その雰囲気は非情に微笑ましいものであった。

「私もやってみたい」

タバサが後ろで呟くが二人の耳には聞こえない。

ルフが隣でポンポンとタバサを叩くのであった。

品評会の結果はシルフィードの見事な空中浮遊が優勝となった。

アグル、サイトは恥をかかない程度ぐらいの評価は貰えたという  
ところだった。

なぜ二人は見事な芸を披露したのにその程度の評価になってしま  
ったのかというと、使い魔は「獣」であることが基本であるからと  
いうことだった。

「何よ。兄様の芸にあれだけ見とれていた癖に！認めるべきものを  
認めないからトリスティンは弱小国家になっていくのよ！」

キュルケが憤懣やるかたなく怒るがアグルは平然としている。

アグルにとってはキュルケに恥をかかせなかったことが一番大き  
いことだったのだから。

品評会が終わった学院はある程度の静けさを取り戻すが事件は夜  
に起きる。



## 第八話 新たな依頼

品評会が行われた日の夜。

昼間は王妃の訪問と品評会という大イベントがあったが今はすっかり静まりかえっている。

アグルとサドラーは杖に火をともした杖を明かりに校内の見回りを行っていた。警備である。

「よし、サドラー。一回目の見回りは終了だよ。家に戻るうか」

「イエス、マスター」

学院内の見回りは複数回を行わなければならないが時間を空けての作業なので空き時間を自宅で過ごすために二人は今まで来た道に戻っていく。

自宅では育ち盛りの娘三人とルフ、サイト、シルフィードがまだ食事中のはずだ。

「ん?」

帰路の途中、とある庭を通っているとき、アグルが何かに気付いた。

「出てきたら? 僕を見ている人」

アグルが暗闇に向かって言葉を発する。

「……………」



暗闇からは一人の男が現れた。それは頭から腰ぐらいまでを口で隠し、仮面をかぶった長身の男だった。

右手には杖が握られ、ただならぬ雰囲気を出している。

「我々に何かご用ですか？あからさまに怪しい方」

サドラーがアグルと男の間に割ってはいる。

「亜人に用はない。用があるのはお前の後ろにいる男だ」

男はサドラーを無視して話し出す。男の目的はアグルにあるようだ。

「何の用だというんだい？あいにく僕は君のような怪しすぎる男に用はない」

アグルが言い終わるのを待たずに男が杖を振るう。突然に風が起こり、アグルたちは突風に襲われた。

「ダァ!!!」

サドラーが気合いと共に全身から衝撃波を飛ばす。

突風が衝撃波と共に吹き消えた。

「どこの不振人物か知りませんが穏やかではありませんね。せめてマスターへの用件ぐらい言って貰わないと」

サドラーがかまえ、闘気を放ちだす。とたんに周囲の空気が重くなった。

「強い男がいるのなら戦ってみたくなる。俺と戦ってもらおうか」「最強」の二つ名を持つメイジよ」

男が杖をつき出す。目的はアグルと戦うことにあるようだ。

「さつき程度の突風でマスターと戦おうなどとは思い上がりも良いところ。マスターに挑戦状を叩きつけるなら私を倒してからにして貰いましょうか」

アグルに代わってサドラーがかまえる。

サドラーの体から湯気のような闘気がゆっくりと立っていき、空気がますます重くなっていく。

「は!！」

サドラーが思い切り掌を突き出す。掌からは炎が発して飛んでいく。炎は空中を突き進むうちに鳥のような形を作っていき、羽ばたきながら相手へと進んでいきだした。

男は再び突風を起こして炎を吹き飛ばそうとするが炎は強風など全く意に介さない鳥のように突き進んでいき、男の目の前で着弾。炎が連続で爆発を起こす。

「うおおお!!?」

男はとっさに身をかがめ、爆発を耐える。

「ぐふ!?!」

しかし、突然に脇腹へ衝撃を感じて倒れ、地面を転がっていく。素早く動いたサドラーが男の横から蹴りを入れたのだ。

「弱い……」

蹴りを戻しながらサドラーが呟く。

男はなんとか立ち上がった。

「なめるな！！亜人風情が！！」

男が素早く動き、拳と蹴り、杖を交えた見事な連携が繰り出される。

しかし、サドラーは腕を組み、目を瞑りながら攻撃をすべて避けていく。

サドラーが男の攻撃をかわし続けて数十秒後、男の足下が空になる。サドラーはそれを見逃さずに足払いをはなつ。

男の天地が瞬間的にひっくり返って地面に倒れた。

サドラーが間髪入れず男に踏みつけを放つ。

男は大急ぎで体を転がし、踏みつけをかわす。

次の瞬間、踏みつけた足を中心とした陥没が発生した。

「き、貴様！」

「足下がお留守ですよ。不審者さん。私程度も楽に倒せないのですか？」

「さっきの火の鳥は先住魔法か？貴様、その耳といい白い肌といい動きといいエルフか？！」

男の言う先住魔法とは杖を媒介としないで放たれる魔法のことだ。

普通、魔法は魔力の才能がある人間が杖を媒介として火や水などの力として放たれる。

しかし、先住魔法は世界のあちこちを漂う自然の力が術者自身を媒介として放たれる。

ここ、ハルケギニアでは恐怖の対象であるエルフが使用すると言われている魔法でエルフと同じく恐怖される魔法。

「残念ながらエルフではありません。それにさきのは先住魔法ではありません。私の生命力を目に見える形に変えて放っているだけです。口調からしてもっとやるかと思っていきましたが論外の弱さですね」

男にとって屈辱の言葉を放つサドラー。その態度は「その程度しかなかったのか」ということを雄弁に語っていた。

「く！」

男は自らを包むように風を起こす。

風が収まった後に男の姿はなく、風の余韻しかない。

サドラーは周囲の気配を探ってみたが男の気配は遙か遠くへと消えていた。

「追っても意味はなさそうだ。サドラー。戻ろうか」

「イエス、マスター」

アゲル宅。

「ルフ〜。ソースを取って貰っていい？」

「く〜え（はい）」

「サイト。あたしと先生のおかげでこんなに美味しい食事ができるんだからあたしと先生に感謝しなさい」

「わかつているよ。俺としては食堂の食事より先生の食事のほうが健康的で美味いから尚更感謝しているよ」

「……（モグモグガツガツ）」

「ああ。俺つちにも口があればなあ……。長いこと生きているけどそんなに美味そうな食事なんて見たことがないぜ。食材が光を綺麗に反射してんだもんな」

リビングでは賑やかな食事が行われていた。

警備に出るアグルが早めに作っておいたのである。

ルイズはキュルケと同じ食卓ということでちょっと不機嫌だが、キュルケのおおらかな雰囲気とルフというお気に入りがいるため険悪な事が起きそうにはない。

「戻ったよ」

「ただいま戻りました」

アグルとサドラーが入ってくる。

「おかえりなさい。兄様にサドラー」

「くえ〜」

アグルとサドラーの姿を確認したキュルケとルフが二人分の食器

を準備し、アグルとサドラーも食事を開始する。

夕食はいつも通りの楽しい物となっていく。

「そういえば、ミス・ヴァリエールは最近よく食べに来るようになったね」

「先生の料理に舌が慣れてしまっていますから。それに先生の料理は健康的だし」

ここ最近、ルイズは以前より多くアグル宅へ食事に来るようになっていた。きつとアグルの料理が基準になっているのだろう。

食堂の料理長が作る食事もかなりの物だがアグルの料理はそれ以上に美味らしい。

アグル自身は全く自覚がないが長く生きている経験というのが出ているのかもしれない。

ちなみにルイズは料理が全くできない。身分を考えるとできなくとも問題ないのだが。

「嬉しいことを言ってくれるね。でも、君も女性なら料理はできたほうが良いと思うよ？僕の母もキュルケも料理が得意だしね。それに料理が得意な女性は大きな武器を持っていることになるよ？」

キュルケの得意技の一つは料理だ。兄様の手伝いをしているうちに自然と技術を身につけ、今はいっぱしの腕前になっている。

週末や休みの日はマーサと共に厨房に立つのがいつもの光景だし、アグル宅で出されるおやつなどは主にキュルケ作だ。

料理には結構うるさいタバサもキュルケが作る料理には基本的に口出ししない。

「う……それを言われると」

ルイズがしょげてしまう。女は料理ができたほうが良いことくらいルイズだって知っている。だが、ルイズは基本的に自分が料理することと無縁の環境で長く育っている。いきなり料理をできるようになるわけがない。

「ルイズさん。マスターはいきなりに上手くなれと言っているわけではありません。勉強と同じで少しずつ覚えていけば良いのですよ。わからないならマスターに教わればいいのですし」

「くえくえく。くかくか、くお（そういうこと。それに失敗したら僕が全部食べてあげるよ）」

サドラーとルフがさりげなくルイズをフォローする。

ルイズはもともと練習熱心な性格をしているのだから普通に料理ができるようになるのにはたいした時間もかからないだろう。

「そうね……先生。料理を教えてくださいいいですか？」

こうして、ルイズは週に一度ぐらいの割合でアグルに料理レッスンを受けることになった。

試食係はサイト、ルフ、サドラーとなる。

賑やかな食事はしばらくの後に終わり、ルイズとタバサが自室へと戻っていく。

ルフとサドラーは送り届ける役目を買って出て、ともに出て行く。

タバサとサドラーは互いに無言で部屋へと向かっている。二人は仲が悪いというわけではない。単にタバサが無口なだけだ。

シルフィードはというとアグル宅の隣で寝るつもりらしい。

「あなたに聞きたいことがある」

タバサが不意に口を開く。

「なんででしょうか？」

サドラーは珍しいこともあるものだと思いながら返す。

「あなたはエルフの秘薬について知っている？」

「エルフですか？なぜ私に訊くのです？」

「あなたは外見がとてもエルフに似ている。だから知っているんじゃないかと思った。私も最初、あなたを見たときはエルフではないかと思った」

今日のサドラーはエルフと関係あるかのように問われることが多いようだ。

タバサはサドラーがエルフでないことを知ってはいる。だが、気になることはあるようだ。

「そうですね。残念ながら知りません。エルフと戦ったことならありますかね」

「……」

サドラーからの返答の直後、タバサの目が一瞬だけ鋭くなる。

「エルフは強いのか？」



「強いと言つよりも自分の戦い方をよく知っているとこのころで  
しょうか？彼らは人間よりも長寿です。だから自分にとって最高の  
闘いがどういうものかを知っているのですよ」

「人間でも勝てる？」

「戦い方によるのではないのでしょうか？人間もエルフも自分らにと  
つて戦いやすい戦い方があるでしょうから」

タバサとサドラーの重々しい会話はタバサの部屋に到着するまで  
続いた。

「ルフ。お茶でも飲んでいきなさいな」

「くわ〜」

ルイズたちはというと既に部屋についており、茶を楽しんでいる。  
今夜の茶はマーサが葉を摘んで作った特性の紅茶だ。

「マーサ様のお茶っておいしいわねえ」

「くえ」

ルフは慣れた味に上機嫌となる。

「美味しいもんだな。この紅茶は。ケント先生の周囲って美味しいもの  
で埋め尽くされているな」

サイトも特別に部屋に入っており、茶を味わう。

紅茶はマーサの性格を表しているかのように不思議な旨味を持つ

ていた。

二人と一羽はゆったりとした時を楽しんでいるがそのとき、突然に扉がノックされた。

「誰？」

ルイズが扉の向こうに呼びかける。しかし、訪問者は名乗ることなく扉を開ける。目深なフードをかぶっているため、顔は全く見えない。

「あなた、誰？」

訪問者はまだ名乗らないしフードを取らない。しかも杖を持ち出すと魔法を唱え出す。

「これは、サイレントとディティクトマジック？」

沈黙の呪文、サイレントと魔力反応を見る呪文を唱え終わった訪問者はようやくフードを外す。

フードの下から出てきた顔は昼間、歓声をもって迎えられた存在、アンリエッタ姫のものだった。

「久しぶりですね。ルイズ」

アンリエッタが言葉を発すると同時にルイズが膝をついて頭を下げる。

「お、お久しぶりです。アンリエッタ姫。サイト！あんたも頭を下げなさい！ルフも！」

ルイズに言われたサイトとルフはルイズに従った方がいいだろうと判断し、ルイズに続く。

「ルイズ、そんな堅苦しい行儀は止めてくださいな。貴女と私はお友達じゃないですか」

実はこの二人、幼なじみである。小さい頃（といっても十年以上前）は王宮で遊んだ仲でもある。だが、

「もつたいないお言葉。ですが現在、私は一貴族の娘であなたは姫殿下です」

時間の経過は明らかに二人に壁を作っていた。それは身分という見えなくとも大きな壁。

「やめて！ ここには枢機卿も、母上も、あの友達面をして寄ってくる欲の皮の突っ張った宮廷貴族たちもいないのですよ！ ああ、もう、わたくしには心を許せるお友達はいないのかしら！」

芝居がかった仕草で身の不幸を嘆くアンリエッタ。だが、この場で同情してくれる者は誰もいない。

この姫は何を悲劇ぶっているのだろうか？ルイズは急激に頭が冷えていくのを感じた。

「姫。何が原因で芝居がかったことをしているのかわかりませんがご用件を伺ってよろしいですか？」

ルイズが冷めた目でアンリエッタを見つめる。身分という壁は二人の距離を大きく開けるのに十分すぎるものだった。

「結婚するのよ。わたくし。ゲルマニアの皇帝と」

気まずそうにアンリエッタが話し出す。先の言葉でルイズの同情を買ったかったのかもしれない。

「そうですか。おめでとうございます」

淡々と祝辞を述べるルイズ。

「野蛮な成り上がりどももの国にと思うかもしれないけど、仕方がないの。トリステインの未来のために」

アンリエッタの芝居がかった喋りが再開される。

「今日、ここに来たのは、あなたにはお願いが……いえ、なんでもないわ。ごめんなさい。自分が恥ずかしいわ。あなたに頼めるようなことじゃないのに……わたくしってば」

だが、その行為はルイズの頭をますます冷めさせた。

サイト、ルフも「何をやってんだ。このお姫様」というような目でアンリエッタを見ている。

アンリエッタの独白は続き、アンリエッタがアルビオンの皇太子ウエールズへ送った手紙があるということ、それがゲルマニアに対して明るみになったときに結婚は破談となり、トリステインは一国でアルビオン反乱軍と戦わねばなくなるのだということが語られる。

そして、ウエールズに送った手紙を取り戻して欲しいことが語られる。

アンリエッタの頼みを聞いたルイズは

「お断りいたします」

丁寧に断りの意志を伝えた。

「只の学生である私にそのような重要な任務を話してくれるということは私を信用するからということだろうと思います。しかし、そのような危険な任務はまず、慣れている者に頼むべきではないでしょうか？私はそのような危険な任務をしたこともありませんし、こなせる確率も限りなくありません。ですからお断りいたします。どうぞ、お引き取りを」

そして、任務を受けるわけにはいかない理由を述べる。  
アンリエッタは肩を落としながらルイズの部屋を去っていった。

「あれで良かったのか？」

サイトがアンリエッタの去った方向を見ながら心配げにつぶやく。

「姫様が私を頼ってきたことはありがたいこと。だけど、私にはそんな任務をこなせるだけの力も権力も持っていないわ。それにケント先生も言っていたことだけど責任問題が発生したら解決できる能力もない。姫様はまず、信頼できる側近に話すべきだったのよ」

ルイズは非常に常識的な考えで依頼を断ったのだ。

「それよりもサイト、ルフ。このことは他言無用よ。あ、ケント先生とサドラーには話してもいいわ。あの二人はゲルマニア人だけど秘密を守ってくれる人だから」

『わかったよ。もしかしたらご主人に依頼が行くかもしれないから

話しておくよ』

「ありがとうね」

ルフが書いた文字を見ながらルイズは小さくほほえむのだった。

翌日。アゲルは急遽、オスマンに呼ばれた。学院長室にはオスマンとアゲルしかいない。

「お呼びでしょうか？」

「頼みがあります。アンリエッタ姫からの依頼です」

「それは、姫殿下からウエールズ皇太子への手紙を取り返してほしいということですか？」

アゲルが依頼をずばり当てる。

昨日、ルフから依頼があるだろうと聞いていたのだ。アンリエッタは結局、オスマンに依頼を頼み、オスマンはアゲルに依頼することにしたというわけである。

ゲルマニア人であるアゲルからしたら即刻、上へ通報すべきことだろうがいざこざが起らないようにできるならそれに超したことはない。

第一、アゲルにとっては国の上層部が何をしようが関係ないこと。

「知っておいででしたか。それでは、アルビオンで内乱が勃発したばかりということはご存じですか？」

アルビオンでは政争による内乱が勃発したばかりであった。  
まだハルケギニア全体に伝わってはいないが一部の人間やアグル  
にとっては既知のことである。

「ええ。渡り鳥から聞いています。姫殿下は言わなかったでしょう  
が、そんな危険な場所に友人と思っている存在を行かせようとした  
なんてちよつと神経を疑いますね」

アグルがアンリエッタを酷評する。

アンリエッタがここにいたら耳が痛かったことだろう。

「それで？受けてくれますかな？」

「受けましょう」

アグルは依頼を受けることにした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9621/>

---

火の使い魔は神様

2010年10月8日10時28分発行